東海道名所圖會

二

和書門
類
八八七六
號
一八七
函
一二
架
六
冊

内閣文庫
和書
類
八八七六
號
六
冊
一七二
函
二一
架

内閣文庫
番號 和 8876
冊數 6 (2)
函號 172 270

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

東海道名所圖會卷之二

目錄

石山寺　古硯圖　頼朝墓　八葉巖　大師利劍名號　脇士　不動　阿弥陀　紫式部像　著賢
本堂　佛舎利　大般若經　亀谷禪尼墓　影向石　遍照古跡　此三所観音　龍八　恵心門　古溜　空明菴　新宮明神　二金剛　東寺嶺　船繋石　北良神影向石　櫻川　高砂井　九相石　経蔵　源氏向　紫式部塔　多宝塔　御影堂　南院　不動尊　谷川　小屋谷　僧院　浮橋　倚子石　水石　横錫　犬狗杉　義平墓　石山寺額　蛍谷　三十八社
龍神祠　奥州行脚図　行脚方人　鬼門堂　岩間寺
田上不動　陀羅尼谷　御霊祠　勢田橋　建部神社　矢橋　草津　立木祠　鞭嵜八幡　月輪池　秀郷祠　幻住菴　経塚　琵琶湖　谷上川　野路玉川　野路篠原　石津寺　山田石亭

○草津

常善寺
灰冢山
三上山
石部鹿鹽上神社
西寺
芰見
横田川
○水口
大園寺
未社十八末社
山上庚申
義朝首洗水
○土山
活人石銘
鈎古城
御上神社
金勝寺
東寺
日雲霊跡
岩根若水寺
水口神社
飯道寺
本社
大黒天
護法石
足跡石
龍化
石南茅谷
矢慶背競石
山口重成碑
田村明神
草津川
小野寺
新若光寺
○石部
阿弥陀寺
平松村美松
万里小路藤房卿終焉地
妙感寺
人師堂
石像
本堂
阿弥井
矢瀧邪天滿宮
人師堂
白山祠
山王祠
向石
伏蔵
蓮華寺
本堂
観音井
道標石
景清力競石
惹安寺
田村川
義經腰掛石
松尾川
鮮坂
日川
梅木
是齊
和中散
○石部
鎮守
思川
本財天祠
山王堂
鏡
楼
茨波の神社
二ノ堂

迎勢國博
攝社
願宮殿
峯捨山
泰宮道
○亀山
瑠璃光院
山色赤人古蹟
追分
泰宮道
諏訪祠
垂阪観音
町屋川
天武天皇社
願證寺
鈴鹿山
八十瀬川
○關
出羽衆
森下
範頼祠
國分古趾
日永
三重川
志氏神社
○棠名
一本松
十念寺
鈴鹿関
琴之橋
惠薬櫻
古馬屋
○庄野
○石薬師
杖衝坂
安國寺趾
建福寺
西川居趾
名産白魚
長圓寺
光德寺
鈴鹿神社
本社
鈴鹿社
○坂下
地蔵堂
市氣神社
白鳥塚
稚武彦祠
采女村
○四日市
那古濱屋樓
名物焼餅
茨女塚の事
矢田八幡
壽量寺
泡洲崎八幡

東海道名所圖會卷之二目錄

来名神社 拝社 末社 母山祠
輪崇寺
御寶殿
大圓寺
不動院
間遠波比 朝祥岩 鯰の倉 西御番 上愛宕
津嶋波
甚目寺
伊波多祠 鼓香物
大福田寺 本堂 觀音堂 覺平法皇宸筆 什寶
佐乃富神社
法盛寺 本堂 金鼓
楊柳寺
多度神社 本社 多度梅 立石 八壺 岩名山 鍋鉢水 長尾山 岩淵
赤須賀地藏 拝社一月連 七色椿 末社 五石 多度川 鷺尾山
津嶋大王 本社 居象祠 八王子 王子 彌五郎表 地毒神
萱津里
反魂冢
伊波多浦
伊波多杜
豊太閤御出誕古蹟
播龍尾
本統寺 聖天祠
佛眼院
最勝寺
伊勢海
佐屋 熱田宮 はま鴻巣

玉清
観音堂
大伯松
仏堂

石山寺
月待
清涼
閼伽
東門

石光山石山寺

志賀郡石山ハ真言宗仁和寺御室ハ屬ス
西國巡禮十三番札所

ゆゑしらぬ石山の月もひろせをめぐりて出る　寛隆

對月

香樓宴坐月明中　一片氷心滿杏空
深夜秋風吹又起　雲邊桂子落珠宮　萬菴

石山寺縁起集大意

天智天皇さぬわみ大津の宮ハ左せ〻附慶雲の住瑞とりのく往古乃聖跡ハ示〻ゆかしくもこゝ〻荒樣をきゝ埒ハく伽藍の繕營ハいまゝ至らぬ故ハ縁起ハ云　天智帝の御宇ハ山ハあらうて紫雲ハにゝくもり天皇あや〻しみゆひ勅使を遣して尋ねれ〻ハ山の半腹ハ八葉の巖石あり奇雲をひさぐ所ハ常ハ紫雲ハ立ち就ハ大聖奮跡の場地をゝ又實隆内府勸進疏云樂々波大津の宮ハ荒樣の瑞紙あり〻〻く地形乃蓮座ハ成ぬと云爾〻一百の星霜を經く時機術純熟しく聖武天皇宸襟の志ハ〻〻を所早く良辨僧正をしく伽藍を建立せ〻めゆ〻むり〻上宮太子より歴代稟承の御持尊を八葉の巖石ハ安置〻百代の皇祚を守護〻萬世の勅願を祷祈〻ゆ〻ゆ〻と

○本堂　天平勝寶元己丑年良弁僧正奉ク基趾を伽藍ハ造立し〻ゆ〻〻〻

弘法大師剃髪名獅　中供僧裕師の観賢傷正と倶ふ大師の廟窟に入く剃髪と時の大師自筆の名号のうへ小縁へ古金襴おりあれと石山寺にあれ共大縁へ大内裏

當寺宝一の宝賢たるゆへ浪陽成院表相と荘厳し

源氏間　本堂の儀ふあり むし寛弘の比紫式部此寺に籠し

石山記云　源氏也物語と作りし所の地也

式部へ右少弁藤原為時朝臣の女上東門院の女房あく作り給ふ

一条院の御伯母選子内親王より内らしのうへ也給ふ女院へ申

させ給ふ式部ふ作く作らせ給ふ事成れは申さんそ當山ふ

七ヶ日あり籠るふ湖のうとはるくと見てさぶしくんをみくと満へ

風情眼ふ遮り給ふ成れは大般若の料紙の内陣ふ敷

本尊ふ申給ふ思ひあへぬ風情成書はけ申へ此式部を日本紀に

なぞらへられを日本紀局と云ひ奉るなり

順徳院御記曰

源氏へ実一説は非人間之所為不可説之事也寸二哥秀逸是

又彼の人及之我朝之最上也又是多の序云　和國の至宝へ源氏物語ふ

石山寺什寶

紫式部古硯

世謂石山形

竪　寸三分
横　寸四分
厚　一寸三分

風藻空餘湖上秋
泓澄吞月水悠々
濡毫紫女今何在
一片研池萬古留

鵜山畑維龍

清輔袋草紙云
紫式部ト云名ニ有二説一ニ此物語紫ノ巻作甚深之故ニ得此名ヲ一ニ者一条院之御母之子也而上東門院ニ令奉ラトテ吾ニ カリノ若也アハレト思食ト令申給之故ニ有此名武蔵野ノ義也
河海抄云
八月十五日夜の月湖水ふかくつくしたる心の澄てるさまふかき海をわたるなど
仏法の大般若経なほ次ぐ明石の女房と書初しとそれより次第に書
ちくく権中納言行成口語者しのひ秘院まつりせるとかく天台六十
巻ふうのひ一心三観の妙理と帯て得るこいひ侍
長明無名抄云
物もしら源氏作る人世のおとこ川あらだめづらかなる
なげいを深く仏にやまひをしる者なるしるとそおほせ侍凡まの者ワざとも
たゆめ申ものとも云 惟中ガ續無名抄云 源氏ハ和国の奇書也細川玄旨
法下の危従ふ京ふ孝清とひし武士国州の牧ふ仕ふ弟年の時より
隨ひく妻曲ふ傳授しく羅ねうぬ或時ふ孝廉
壬旨法下ふ世間の便ある者ハ第一と仕ふと思さ多ろれど

源氏ものがたりと答ひしこ哥學の物語第一のものと同ク同しく
源氏と答ひ侍ものしかし源氏ふくすみの事と第ぬ源氏と百遍
ひらさふ人るりの事新學の成就と宣ふ孝廉ものがたり
源語秘決ものがたり巻ふ源氏の大事と十五箇条あり
一そうつか 源氏の服有無の事
一夕顔 侍童着於貫事
一めかひ 大ぶりの隨身の事
一めかひ ふりいさ行くのり
一ゆうな きくおさの事
一とうな とうりめくのり
一えのり 蓋中ふの事
一ちのうく 源氏ふちころの月のり
ふのうち三ケの大事ハ楊名の女絲のこと
ふみ巻ものげのり也とさすがの奇人もの
ふ人ものとさ事ハ和国ふひまれく
紫式部畫像 源氏の間ふ今ハ所の新係ハ物語古右近
讃曰 有門空門亦有亦空門非有非空門 撰ハ近衛三獲院信基公の筆あり
ものがたりいうのり人ふおりひしとも
ありひとくれを 近衛信基公
源氏ものがたりとてんのひとらしくものとくとくとく

三台四句文を贈てかゝる事あらはさるなり

僧都慶運

式アハ橋那院の贈僧正の許可を蒙てかゝる事あらはさるなり天台一心三観の血脈を入るゝ

○てよりかゝる事なき法華三昧院の由緒なるもかゝる沙汰あるべし

硯石　源氏の間の遠寄なる式アハ所持の硯なり源氏をかけるとかゝる人ハ石原石山の石なり紫色瑠璃のごとく又彫刻と石と形といふ都て一面乃硯なり海二つあり額ハ牛舌の形と彫る左右ハ竹ハ海の二面あるなり日月法陽の系と顕し鯉の方ハ濃紫の方ハ淡紫

大般若経　式アハ自筆之陳情懺悔の為ハ仏経五部書く奉納し給ふ

源氏の間　式部卿宮ハ慈世の可人源氏のみかど堂の内陳ハ安置しけるなり

半古紙　今ハ至るまて仏事

基紙　ハ数くあれをあくに繋しに

○二十八社　祇園寺の鎮守なる祭神伊弉諾尊伊弉冊尊神日本磐告尊尊式

千社の二十八部衆を一社ハ

勧請し給ふと云

○経蔵　孝謙帝勅して一切経を写しめ給ふ紫式部石塔　仏像いかの仏ようなる建立

○二層多宝塔　建久の比将軍頼朝卿の建立しなり本尊大日如来四隅の

柱ハ三十七尊の画像あり用青砂厳あり

○頼朝墓　宝塔の辺

○亀ケ谷禅尼塚　頼朝の御妻政子の母源倉志ハ足ゆ

○観月亭　宝塔の北ハあり或ハ大観亭とあり

野田橋の北ハ人眼下ハあり石山古説云仏法

○鐘楼　中堂の北ハあり石山寺爽なる亭

○御影堂　又三昧堂或ハ法華堂ともいふ

楼門の下ハ地ハあり

中央弘法大師　法堂ハ八祖の画像あり

沈良辨僧正右内供淳城

当寺僧寶八傳曰

良辨淡海百濟氏子母掌失於来樹下有僧史巳長而聖武帝敬崇為帝師寶字四年勅為僧正帝創東大寺鑄遮那銅像聚金為薄此時本邦未有黄金乃勅使辨所金峰山金剛蔵王以資銅像薄入山持念夢蔵王示近淀湖西之地就彼持念必可得黄金辨便尋于縛盧安帝所授如意輪像此像益自聖徳皇太子歴世上者持尊即六寸金銅像也已修念不幾自奥州始貢黄金辨欲奉像還像不動巌坐乃見狀奏朝帝先千東大寺叡伽藍勅名石山寺當夷基趾地中得五尺寶鐸以為霊地如詳載寺志辨以寶亀四年閏十月十六日化云云

延喜の初年聖宴多所もあるに弘法の侍記ハ

観賢淳祐ハいづれ庄毛ハ桜尼良長ハ南都東大寺の侍記ハ

近州志賀郡の人とあり相州之山寺の縁起ハ相模の国司藤屋太郎

太夫時忠の子ハ出誕の後ハ川去ハ母の胎ハ

第六元の人附去ハ

金色の鶏冠ハ

赤子ハ抓室に

昇くぬとあり故郷あれば大山寺なる鄙を出疑所、相遠あり又末卷相州の下に所に

○八重櫻　伊勢堂の西にあり古木なる花多く世々植継ぐ　拾遺

石の堂はまへ花多く櫻の木に書付多く

うゑおきそいくそゆくらん山櫻あるじ白ひと風ふかぬ世も　みゆきに

○影向石　日前にあり観音

影向のいしといへり

○船繋石　北良明神船をはかせ給へ

○倚子石　岸人の安座と

○霊験あらたなる故あり

○猶南院毘沙門堂　石塔の上にあり本尊立像毘沙門天脇士吉祥天女禅財

子孫子建久の比梯部頼親紀伊国毘沙門の威力とりわく

故と滅しくる故滅寺より南に寺号せり山親紀

○食堂　下塔の地にあり聖徳文殊と安置

長八尺指数大仏の他天台山破掛に遷る湖れに落て東寺ケ崎に

流出とあり　○蓮池旧跡　元政の第山集に出

○北良明神影向石　食堂の南にあり初メ当寺茶創の時地主北良神山石上に

安座して石仏観音の霊跡を示し山の鎮護

八業の叢ある事なり　○手水石　倡文八世尊院の一代恵命院権僧正

指掌しゆへとあり　宗盛の筆あり

○不動明王　中むし愛想ありく　○龍蔵権現　当山の鎮守之然を権現の別社

仏とあり　本地将軍地蔵

○世之所観音堂　中に信尼あり　新

建立しくり

○閼伽井　下塔の北にあり昔より観音に供しまつる水にて本尊の下の石より

湧出る潮出次潮冷味人中古地蔵の井は此里より南乃小谷へ

今に其名あり川とあり　あ之度に及ぶ

○天狗杉　山の入口にあり高さ　護法神

山杉に棲ゆへとあり

○柳尚　天狗杉の西南にあり　建暦二年二月二日本堂焼の時観音

飛出給ひし時伝の柳は上に埋り次今俗の形残あり次

閼伽井のかたはらにあり

○谷川　泉飛雨洗聲聞夢葉落風吹亀相秋　高五相如

朗詠集　孝標女

谷川のかたはらにあり宵明乃月　住房の

○奥門跡旧趾　あり井あり　彩穴の道にあり　成就院とヤクの賢隆

公條　産を尊海　和尚の會あり　又頭の法仲もあり

新拾集

猿ぞかくちとせのやまもかなそうろ　桂女の別宅のそそをしめる　板阿

日

住あれくやしき原なる山さとの万松をむすぶ　山家の松

○龍穴　井より奥三町あり　今

実は塵外の仙境なりてつき先

早魃の時法雨の祈祷と

てつたへ霊験いちしるし

○尻掛石　彩穴の側にあり　坐しくつる　孔雀明王　大徳に感海和尚と人あり石上に

早くとも池れ　龍王懺に鼎に緒龍池中

出現しく和尚仏禁敬しく
朗詠集 蓬壺波路遠雲千里白霧山深鳥一聲 直幹

○義平墓 於穴ゝ奥二町

源義の兄源太義平迫石岡石山寺の辺に居住し居る所波波之帝御所が
帝等生捕く六波羅へ引て誅せられしハ永暦元年正月廿五日
生年廿二才平治物語に又くさ義平の軍に打負て
此所まで落のびし当寺坊法華堂の
御所駆向ひ遂に捕且る其遺骸の
義平の首を切し地へ都名所図会拾遺に又くさ
もかく空地へ都名所図会に今に至りて紫雲居
○小屋谷 俗黛谷と云ハ此辺の谷れ也名義平
○厅履岡 当山の絶頂と云ハ此供僧一の背とあれ
遺して昇天しと那

○東大門 東方二王門と云ハ都て今の諸伽藍小坊くハ大器建久年中
鎌倉将軍頼朝と亀谷禅尼の勧進に中興乃
志願を記しゆへ此門も 二金剛像 東大門に安置運慶湛慶
那其随一と云

石山寺額 源原行能の筆 嶽の背面に仁治元年十月十三日
従二位源原朝臣行能書之云
○右ハ門内の堂塔の名蹟く当寺房の旧跡多し 器之現存の寺院門内
の如き 宝性院 明王院 吉祥院 法華院 密蔵院 持宝院
世尊院 圓乗院 門外の西ハ 松中坊 中西坊 西本坊 東本坊 岩本坊
岩本坊 梅本坊 東池坊 多聞坊 湖月坊等く

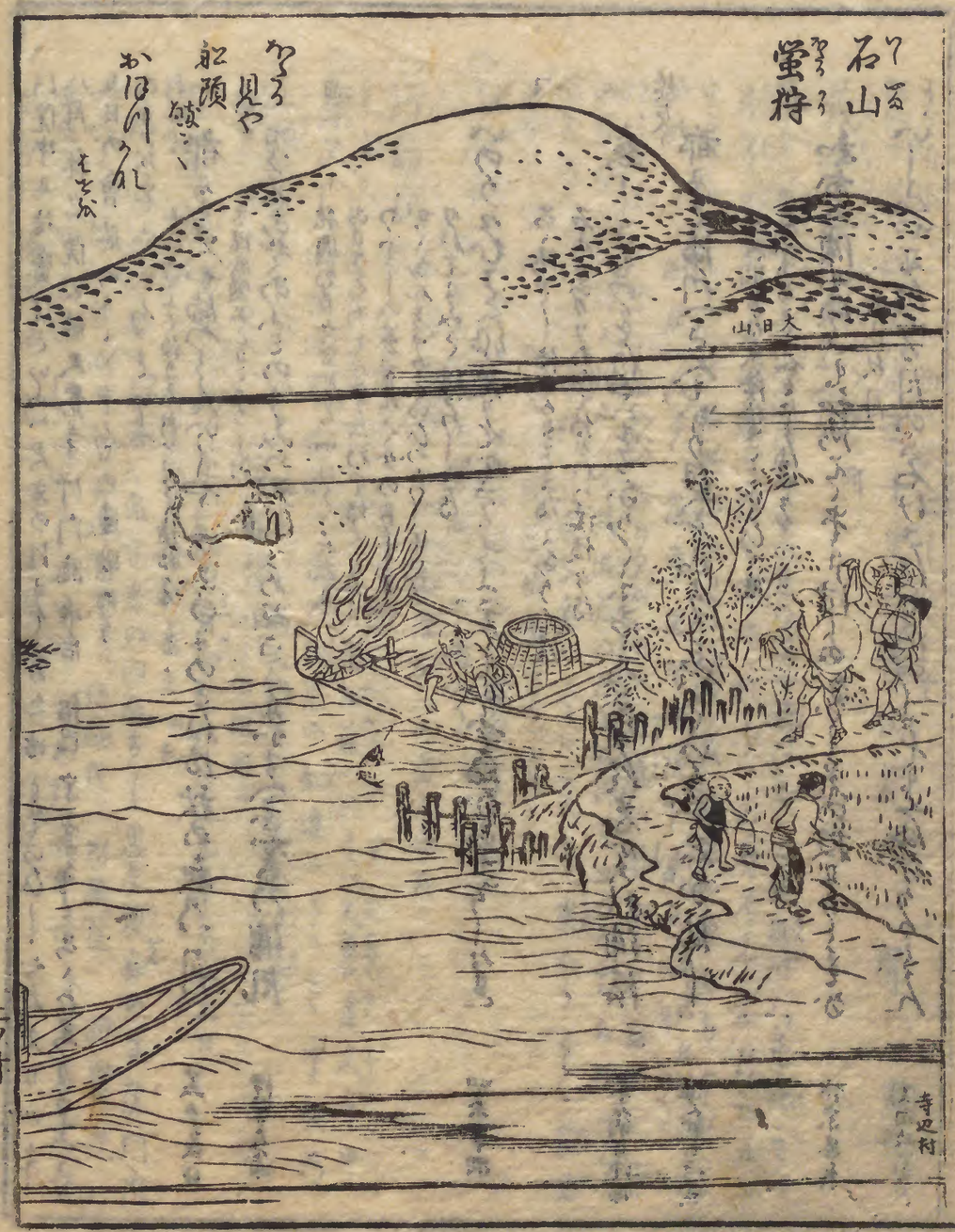
此院中ハ持宝院といハ天文の比まて倉之坊 ひしく天文廿四年
八月 称名院公條大覚寺御門跡准后 紹巴 宗牧 あとに
五日の會莚あり千句の連歌あり
さもとハ石山の月 石山寺にて作りし月と読作
新古今 石山寺にて作りし月と読作
都ハも人や恋しくやまのみねのもれ行秋の夜の月
後拾遺 石山寺成順石山五こりし付
又くもの出てあくるのうみいかりめぬさ[illegible]ハ浦風

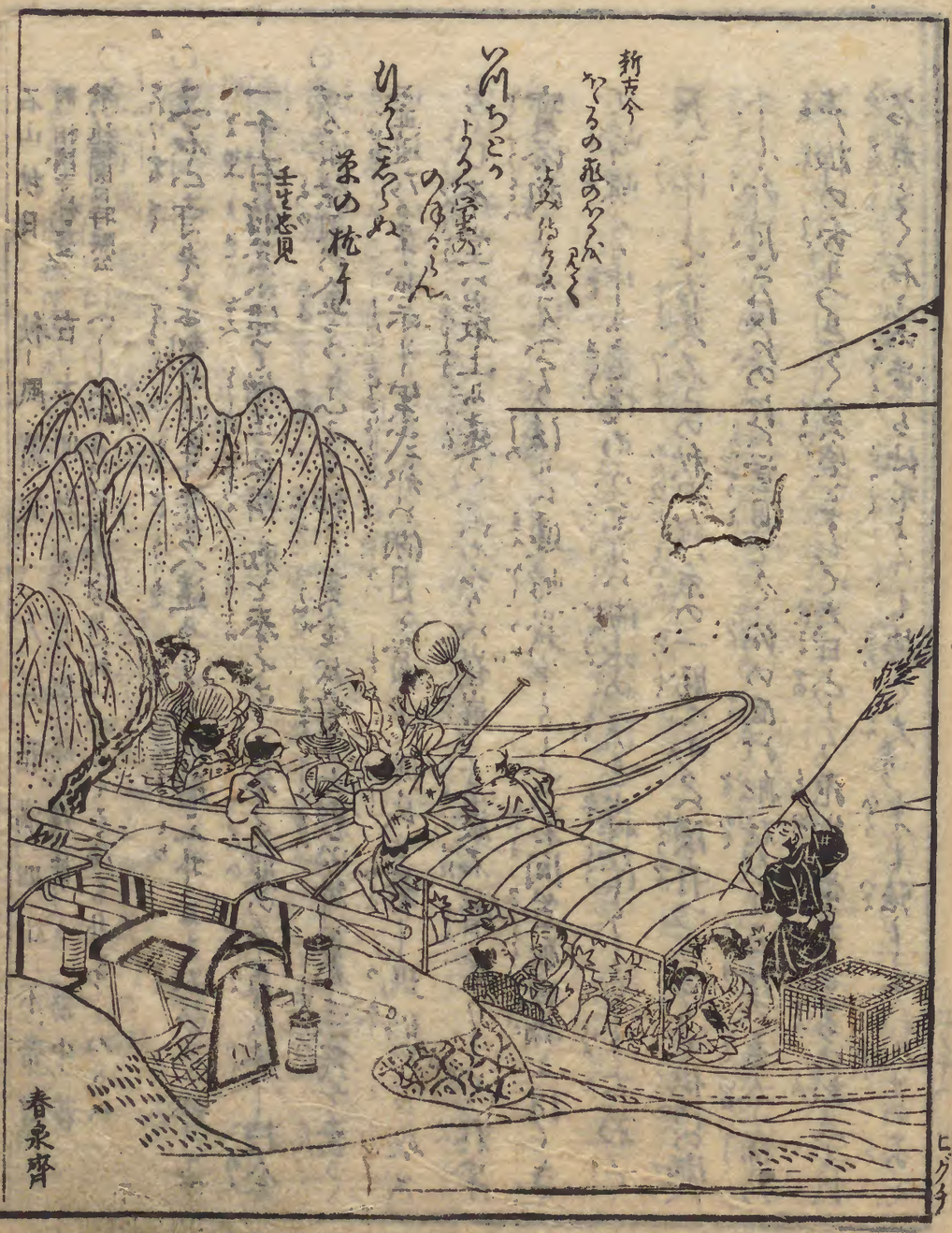
紙通知百女とおりひかけく石山ハ
おりくわとん事公行て行りく
あくりの美を見くく女のあ[illegible]
かくあんをうしひつくり行り
くりとうくはくりく行
いのりくむとんゆ先うてかきうてよさてもあてあかあをを一首
ち行をし行りく女をを海ゝあり上後
石山ちりあひて行れい後行く行
恋しさもつをれやいきるかりくふあてろさ志かゝれ浦浪

都もく海川ちゝもおりほをを山ちりふかくいりやちふ海
赤大納言為氏後拾遺ことえひて後
石山るみくくをにに海をくる

和あの浦ハ海ハも海ハて来ちはしぬあかし米の数ハあるをる
石山秋月
いしやまはてる月のさえけさは海ハ海かうるくん

表紙長絹
伊勢之浦
四条中納言
表紙三浦浦
権大納言行成
惟宗忠家
関白政宗公


石山螢狩
大日山
寺辺村


新古今
春泉齊

石山 秋月

詩、相國寺林長老　秋風蕭颯一天涯霜滿四山不帶霞
歌、猪熊関白時熙公　古木間岩寒月影吟殘葉々霧中花
いしやまのうみてる月秋はかなもをあも外ぬ〳〵ぬらん

夫石山寺を案創より年案久遠なり〳〵延暦二年五月双びく郊外
一千有餘案小建て僧正良辨勅を奉てあく朱の大悲の本願成安一持念
せる五陸奥の金をもくしより初く黄金成貢る白縣明神公叢上に鎮て垂く
霊迹なる事成示し案式部ハ湖月を賞して源氏を著し瑞璃の古硯成
ちぐむ本堂ハ巖上に建く其めぐらい崔嵬る巖石層々として粉字
寶塔所〳〵に見へ〳〵り後ハ連峰嵐々として岩間笠取礎潮とはぐき
て峰嵳る中に壺場あり茶ハ湖水の流を淋花〳〵く今古ハく
月を浴して古朱石山の秋月ハ〳〵京の一勝へあるく漁舟つ〳〵あり供佛の瀬へ
下し卯月さはたの比ハ蛍見とく河の面ハ船柱びよこ弦の若今掾乃
声梅の香ハつ見く美密をかちて大日山より花咲る蛍火ハ弟の数をに
名産〳〵く石山の蛍ハ他石より也極く大キク光も強しあし風土の者く

西国巡礼もあく朱ハく長旅の賛成散し春宮坂路も共に打混しく
夏成催次垂〳〵より古人の秀詠多く代々の勅撰ハも多く出さり
三尺の童子ハ初の巻成の表書ハ石山秋月と記るも貴しく
徒とかく山名勝を賞るの〳〵あるべし謝莊ハ月の賦ハ清質の悠々
より成升澄暉の藹々より成深成初宿縟ある事成掩ひ長河の映を輪を

（彩物抜）
七成義を山のうをを掘りて危ぬ
山寒深々石山の名也とあん時ゆ
○是より已下石山寺門外の名所

○東寺ケ嵜　大門の傍にて石山寺門前の間いひ〳〵殺生成禁
東寺ケ嵜ハ殊小　ろ事編貞院宣成家の下知状等たびく〳〵乃ぶ今〳〵
漢と禁し〳〵く

○蛍谷　湖水石山ちより粉田まその米ためより初夏の比ハ山谷より蛍多く出く
所の名ハ観　蛍谷より流を渓門の橋と

○浮橋　或ハ憂橋又浮身橋ともいハ山橋ハ古より名所しあんヤ〳〵

玉葉集　因融院の石山ハおかち〳〵ハ九月毎日殿上人ともうたそ〳〵と山五まりて行〳〵ハ

和尚も必るみちゆきのうるおいのみずたまりあるみのうを表　表人魂言伝住
縁起云寛和元年八月廿九日　園城院
石山寺の鎮守なり　郡内通称なり　後十月一日
○荒痛菜師　西国より石山の道の側なり　石山寺の別所
本尊石像菜師日光月光十二神将の像なり　縁起云延寶四年石山寺開帳の
時龍女山堂　なり　其鬢髪
林　云　山石仏像
里の素　素刈　山石　嘻嘻痛　仏の極　剛の因
寄昌　人　当寺　再建　安置　享保年中　住僧
○空明菴　縁起云　法師の老母の古跡なり　石山寺村　今田畑
石山寺の　ヒメワン　瑞光寺　安毛の中或は空明居
○城墟　城の今民間に子孫あり　井上
○毘沙門堂　城の護神　八尺半の天像　威霊の相ばく
○新宮明神　石山寺の鎮守　寺造村　新宮尚社
二日　神　新宮
今は神輿一基のみ　新宮の
新宮の

○財川　石山田圃の中ほどの溝水　財川　往古の居宅の古迹　故名
右已上　石山寺に属
石山の奥岩間ほとり　真言宗
西国巡礼十二番札所
岩間山正法寺　長四十二間　洞仏　弘泰澄和尚の持念仏
本尊千手観音　脇士左右　右薬師　弘泰澄
それ当山は　元正天皇　光年中　弘泰澄　救世身を放捨
安置　一株　金洞千手　北岩
坐禅　苦行　中　
桂樹　十二年　及　又伽藍の西南
竜　足　岩間　石山の間　千手の像　他　金洞の小像
路　老　西国順礼の歩
陀羅尼谷　石山より　供僧　観賢
傍正の滝　八日々　細道　古傳云　陀羅尼を誦
御霊祠　男多　格　瓜の南　居川村小大治村の生土神
例祭　三月　二日
赤神大友皇子　相傳　皇子　見　天皇　合戦　大友皇子
別所常在　山中　岩田格　日本紀云　大友皇子　左右
男　依　等　即　軍　于粟津　罪　下　是　日　羽田公矢國出
雲臣　狛　合　共　攻　三尾城　降之　壬子　男依等斬迫
江　将　犬養連五十君　及　谷直塀手　於粟津市
是大友皇子走無所入　乃還隠山前以自縊焉

國分山
芭蕉翁
幻住庵
古蹟

やまもかくれあらてやきの
枯尾花
芭蕉翁

岩間

國分村

櫛の
すつり
ふるく
朱を
岩田の
奥
今

笠取
山

椎木
多一

多宮

幻住
庵跡

清源

岩間寺
西国巡礼札所
第十二番

幻住菴奮蹟

俳聖芭蕉翁幽棲の蹟之男田橋より石山寺に至る途中に標石あり男田の傍に田雨橋建る是より八町半奥之国分とゝいふ八幡宮の御殿の軒に板面に記しく此所より幻住菴の由緒に関地

経塚 旧称の傍に建られ雨橋表石に建る又幻住菴の由緒に関地

少くの清水 経塚より十歩許にあり清水あり幻住庵記に

幻住菴記曰云

石山の奥岩間のうしろ小山つゞき国分山と云の麓に国分寺の名残侍べし

蘿に細き流をわりて翠儀に簾を掛たる体は弥陀の名号唯一の名あり基長なる名所旧跡都光をかゝやかす利益の

塵を同じうせんも又半日にして人の住ひ草の戸ありよりだ根笹を敷て狐狸

ある僅に住捨し草の戸ありよりだ根笹を敷て狐狸

幻住菴と云中略山は未申なそびき人家より

南薫峠より北風海を浸し深し日枝の山北良の

宮猴より幸徳の松は霞ふかし殊に猪

小野小原の木樵の若蘿の小田ふる苗代奇蛍飛

士峯の煙ふかしく美景也

古人を思ひ今人を見て

くはふるゝ人の細代十丈が業

の漁翁と名ばけ彼海棠の

除住が徒

空山ふる雨と

人高く住ふし作りて

蕉翁おくみこと彩の業月を屋く長明の方丈記ゐ敬く幻住菴の記ゑ
書れ一笈九旬ゐハ一石ふ一字ゑ深ゐ法華二十八品を書寫し里のワうゞを
あ川先く礫を敷ゐ其債ゐハ糖菓をそ〻の人墓あれゐ換く其功を遂ゐひぬ
今ゐ〻ゐハ山絶石土中より出るとゝ其記文の末ゐ

先ゑのむ椎の木もあり夏木立

山一句を遺し〻く閑素幽棲の風流ゐ著し生涯名利を棄て月雪ふ戯れ
ゆハ記中の社ハ近津尾八幡宮とく國分村の生土神ゝ聖武帝の御時營ひ
し國分寺ハ廢〻く本尊薬師佛ハ村中の道場ゐあり又別保の業師もいふ
やうくゝの寺ハ汲みをゆ出ゐ侍ゑ〻ゐ椎の木ハ伯夷ゞ巖ゐ換くり妹ゐ
脂不の城橋ハ芳ゑのさ〻さゞら嶽ハ幻住庵より東の方谷上山のほゞたゝ
千丈ゞ嶽といふハ押の方ゐ〻くびやくりの高山ハ千丈南千丈の二峯あり
彎腰ハ千丈ゞ嶽より一里南ゐ〻く芳田川くりゐゑんゐふれど寡もそゝ
そ〻と係ゐん笠取山ハ石ゝと礎礎の中ゐありされゞ宇治山の喜撰ヶ嶽

洛北の朗詠谷芳野の苔清水外山の方丈石ゐゞゝみゞ同日の論の山居ゐ〻て耕雲

釣月の隱逸あり

太神山不動寺

谷上山高峯ゐあり又田上とも者ハ世人谷上不動と称ゞ
谷人俊苞と号茶ゐ供ゞ三年まの祀下ゐり
本尊不動明王 智證大師の作の俗長ゝ尺高山の系創る 清和帝乃御宇
全躰ハッ岩ゐあり〻く八童子ゐ紙表し瑞ゐより川〻く三年ゐ大師ゐ近に到ゐ夕人バ不動尊の
忽然〻く〻れワゝ山嶺ゐ〻く〻く作を待年久〻く〻に霊樹ゐあり〻れを
不動ゐ紙彫都〻ゐ小安置ゐハ國家擁護の靈嶋ゐ〻んゐんを告ゐワ
神明太神ゝと云後ワ〻く又人ゞハ大作感嘆〻く明王を彫刻〻一字を造立
〻く田上不動と称ゞ近年系師乃ゝ近國俗人月毎の御日詣多〻
又毎年正月八月ハ廿二日より七ヶ日の間閑扉ゐ〻
田上川 田上里ゐ谷上山ゝ出流ゐ芳田川の源を流ゝみ田上山
田上里の古塚多〻 後頼ゐの山居ゐ〻ゐ古塚ゐ〻ゐ今さゞゐ〻ゐ

拾遺

月新の田上川ゐ清〻れハあ〻ゐ

新古 田上みくゝ作〻

藏孫とる芦の花やの寒〻れハ爪木ゐつむ舟いそくゐ

新後撰

ゆゝ火の光もう〻く成ふゐ田上川乃わけほの〻そら

後後拾

ゆ〻紙ゐ〻ゐ行〻〻ゐ侍る夜ゐ〻れ田上ゐ山ゐ多ゐ帰や

長明方丈記

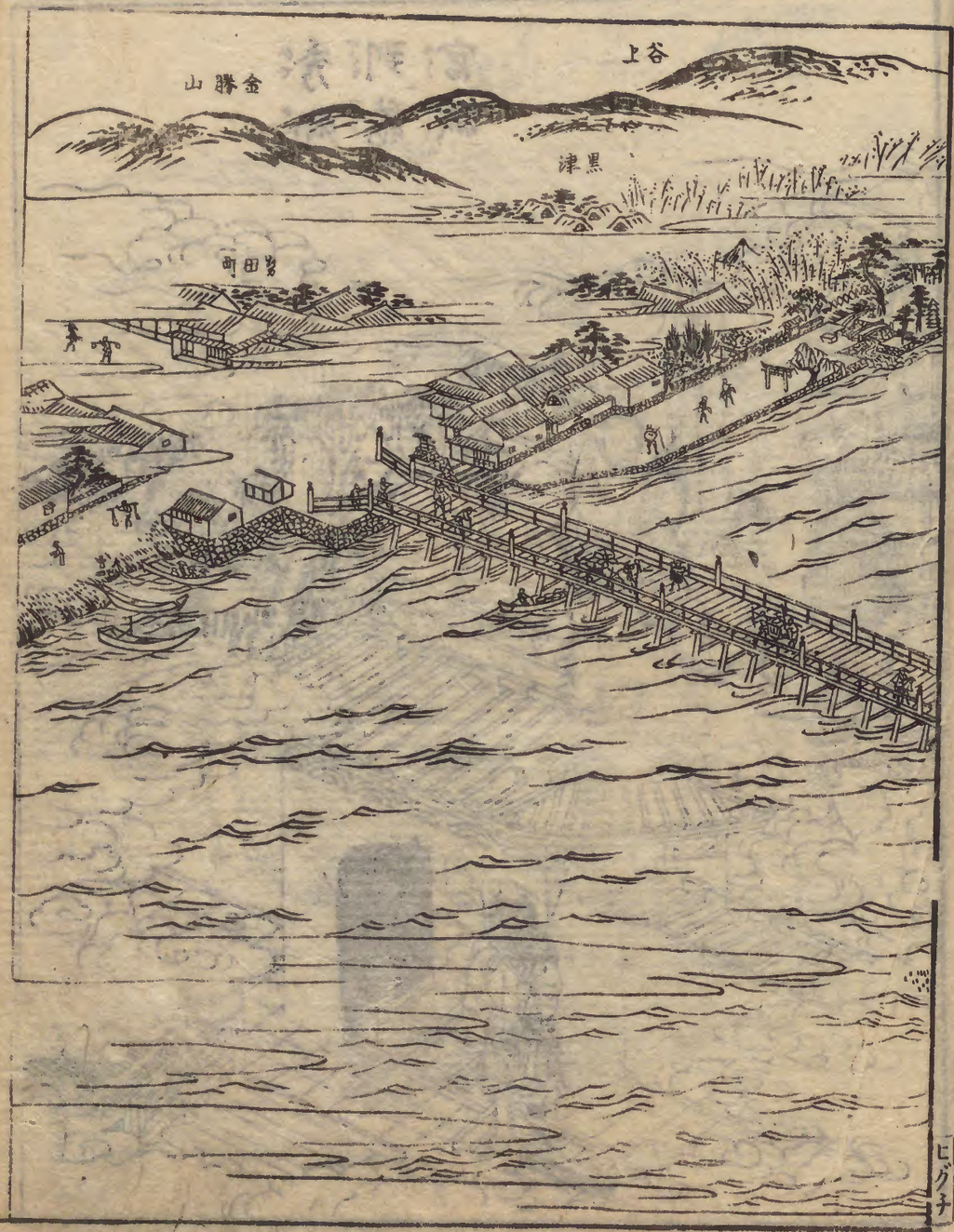
藥師の御紙ゐ〻ゐ深丸の筆ゐ作ゐ田上川ゐ
ワ〻ゐ〻猿丸ゐ墓ゐ墓と号ゐ猿丸墓ハ山城國ゐ〻ゐ都名所圖会ゐ〻ゐ

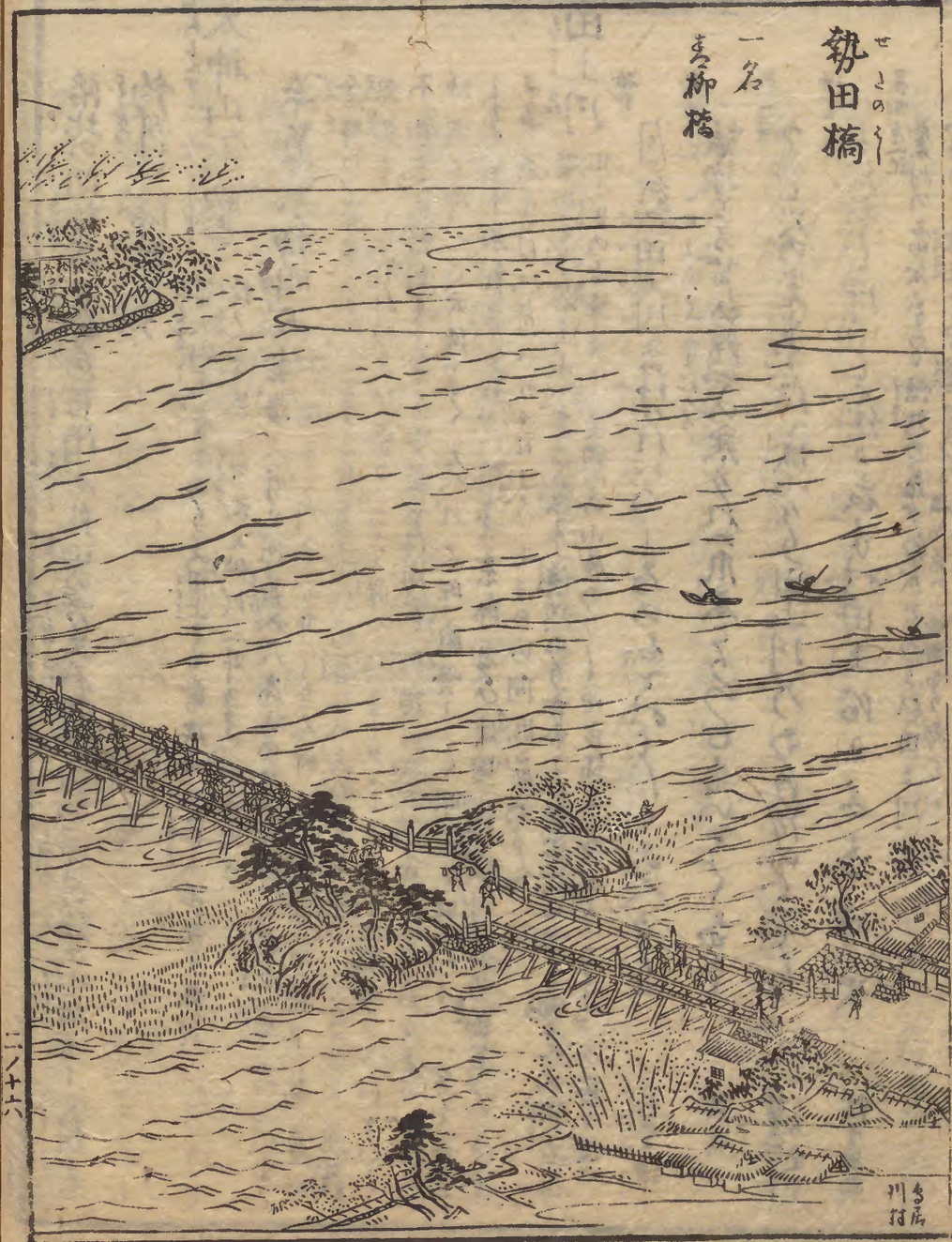
清宗元輔

純信

後光明帝御製

ゐ國物


谷上
金勝山
黒津
町田村


勢田橋
一名
唐柳橋

湖水の
龍宮城へ
かりうつり
鯉紺
うかび
鱗
下河邊維惠

秀郷
到龍
宮城

勢田橋

志賀郡栗太郡の間へ小橋長二十二間大橋長九十六間中洲あり
勢田 一名青柳橋 山嵜 三代實録曰貞観十一年十二月四日勢田橋焼ること三
日 古今和歌集曰勢田橋或へ橋ともいふ橋ともいふ

真木の板も苔生そうり成ぬるは世をへんせこの老橋　匡房

新後撰

湖のうみや霞てゝ遠の日も深るも遠し勢田の長橋　為家

風雅

御祖社の淀をきあるあけぬるせちの老橋　東盛

新後拾

さゞ波やうち出くれいの白妙の雪成けうるせゝの老橋　惟賢上人

夫木

朝霧を小三上の山みくく旁立つるせゝの老橋　長雅

治承の頃平清盛の子宗盛の弟頼政の孫仲綱の子源三位頼政の嫡男太郎兵衛尉仲綱の子源三位頼政の嫡男太郎兵衛尉仲綱の子源三位頼政の嫡男太郎兵衛尉

田上不動寺
谷
俊頼卿
吉賛

湖水 和名抄に湖記ハ七十餘所あり 集 行基も古蹟多し

風波なるみの水海を晴く月かけ清し 沖津島山 赤間の関

日 をく波や夕陽照あはれ夜浦くせむくるあけもの 浦氏

日 夕陽の海や汀のみ多き 亀山院

昼 小夜の海や霧てと波さわ湖ハ行かとみぬ乃乃舟 宇治の言有光

新撰拾 月新もみてる浦の秋あれハ汐やくあまの煙こそあはし 右家

新古 湖の海や月の光はしりくハ波の花ハも秋ハみえけり 和泉

家集 雲の沼湖の波や萩花の咲ハ夏ハ来川む湖乃乃海 後宗法

湖水の一名湖の海或ハ淡海大宮ハ近江といひ又ハ琵琶湖といふ形ハよりく鄂ハ東西十里南北二十里堅田より粉田ハ至りくせ海く琵琶の鹿背小仰ハ粉田より宇治ハ至りくハ細々しハ海老尾ハたとへハ柱ハ竹生島ハ都く山谷の滴くハ百八川粉田の下流ハ供御瀬黒津南郷ハ奥く巌石高く聳く両岸の樹ハ鹿巻といひ白沼濁り

落る所を宋濯といふ是ハ宇治ハ至り淀川ハ入羅波より大洋ハ會流

湖水の名養多き中ハ鯉鮒江鮭鱒粕鄒粉田鰻堅田鰕氷魚ハ内膳

式ハ少く供御と成其外総水鮭蟹鯛泥亀ハ或粉くハ湖水

圍ひ水郷五百餘村佐々木百万石みが琵琶湖の周ひ〻むり〻蓮五年

一夜ハ地裂く湖と成同時ハ富士山現ぜしハ不二禅定ハ迫江人成

先達ハ勧しむ善積一郡ハ已ハ湖とあり〻今ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻

日本紀古事記ハも見へ〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻

山谷の中より落る泉ハ孔子子路ハ謂く白丈江ハ岷山ハ流く鰐ハ盥む

ほ〻〻〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻

うみと称ぞるりのハ琵琶湖ハ〻〻〻〻ハ〻〻ハ〻〻

建部神社 粉田ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻

祭神大己貴命 相殿姫宮 天武帝白鳳ハ年の鯰坐ハ三代實録曰

貞観九年七月十日従四位下を授くとこ〻

月輪池 月輪 粉田ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻

ハの方の沈の中ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻ハ〻〻

野路の玉川古跡

素堂

あやめ草
懐旧のもはかなしもかな
一村見ゆる
里遠の松原

芭蕉

六玉川の中
豊後の玉川

新拾遺
さらぬ森の
おもかげに
萩ふく秋の
月も色なる
豊後の
玉川
太宰權帥
仲光

法橋中和

陸奥
武蔵
近江
山城
紀伊
和泉
萩
小
水
紀伯

聖路玉川（のちの玉川）　聖路里西の橋ふる道の傍ふ長サ武間半新橋をゐまの堰堤しる小流の流れありて玉川の古名といふ六ッ玉川の其一なり

千載

ゆるもあめく聖路の玉川萩咲くを色ある波ふ月屋とうつる

聖路藤原（のちの玉川村とす）　土人聖路村と云　玉系　古来和歌の名所

後拾

おもふ人ゆえ古つゝ人神ぬれくりさをさを聖路の藤ゝら

佐渡守長

藤ふる聖路の志のつゝふ俤くさに都を養ふ見ん

安加門院記系

むゝ去治佐頼朝卿伊豆國怪小流を出く流と上ゆ人時佐々木四郎高綱の郷都の恩流とゝふ人所ふ住久ゝ今度吾妻へ下らんゝく愛足しゝるゞ氏系原ふく足と流ゝつゝふんざふる所ふ馬ふ引く来ゝりゆめゝる縁ちゝづたゝゝく

そたがゝ一ハ都のりゝふくゝ出ゝ初旅ふしを足もつゝれゝう聖川のむひちゝぐ其馬かゝしゝんやといふ馬を学ゝくゝ川向のまでかゝ一ドだゝ一りをゝうゝゆゝぐ

ありうせゆゝと紡束ゝ馬をかゝしゝてゝう名る縁ゝ名ゝゆゝうゝる氏ゝ馬ふ載りめゝゝ喰ゝゝく

ちひりゝたゝゆゝをゝくゝとゝてゝう名る馬を紡束の所へふくゝありさゝゆゝふふ分ゝく来る

高綱鞭とゝあゝく逸足を出ゝ駆ゝ名ゝば馬を立ゝくゝゝ馬盗人ゝゝゝく

喚呼んゝぐ追かゝ伝流ふゆゝ所堤ふゝゝく流先ハ朝廷原ゝくゝて人佐ゝも殺ゝゝ

ありゝ立ゝく馬を殺ふ馬ゆゝゝんゝゝく立寄ゝゝ殺ゝて其馬ふ打駆東へゝゝ

あゝゝゝこの鞭ひよ猶利を深ゝく逸ふ頼朝ゝゝ天下をゝゝ勲功を賜ふる時佐々木

ゝる怨い迫に国と名ゝく申ゝうけ佐ゝてゝゝの馬を分ふ氏ゝ

ありゝ寺と立ゝく懇ふ孫を弔ひ奉ゝく

他若ゝして寺領ゝゝゝと身ゝゝゝ

矢橋　野田より矢橋里ふ大津松本一ゝ里の渡口ゝ初メハ年歴久遠ゝて未詳

野田ゝ橋軍陣の時伝渡口ふ関所ゝゝ幸明記ふ見ゝゝゝ今芝田氏渡船の支配次

矢橋帰帆　釣竿千熟白頭翁辛苦客舟西又東　倶國寺林長老

真帆ゝゝく矢橋ふ帰ゝ去後呂ゝ公榮達一盃中　近衛関白時熙公

幾度風帆帰去後

浦も浦海八景の其一ゝ矢橋ふ今ゝ名ゝ所ふ

戸津坂ゝの人家志賀浦庵茅の松ゝ出の渡ゝゝ

残ゝふく鐘ふ月ゝゝゝく風流の徒地ゝ

鞭崎八幡宮　矢橋ふゝゝ地の生土神ゝ

御系四月初卯日神主紀氏護所

祭神應神天皇　左神功皇后　右武内大臣　社傳云

元年十月二日右大將頼朝卿上洛の時伝矢橋ふ於ゝ馬上より鞭を取りて社の

神社いふふと名ゝ八幡ふ於ゝ馬上より鞭を取りて社の

有ゝく再神ゝゝゝ故ふ鞭崎の号ゝゝ

ゝく社殿再興の事神社碑紫ふ見ゝ

攝社　神明社　天満宮　子守勝ゝ神　稚子祠　除難井　安堵松

山王祠

社頭ふ古跡ゝゝ　白森　齊殿　土人勅使塚

石津寺　矢橋の渡口より南ふ所ふ

湖耀山と號ス

本尊薬師佛　初メの本尊ハ傳教大師比叡山ふ於ゝ根本中堂を建立

のゝ作ゝ試ゝゝゝ

一躯ゝゝ後世元禄年中江府東叡山中堂を建営の時伝本尊ふ

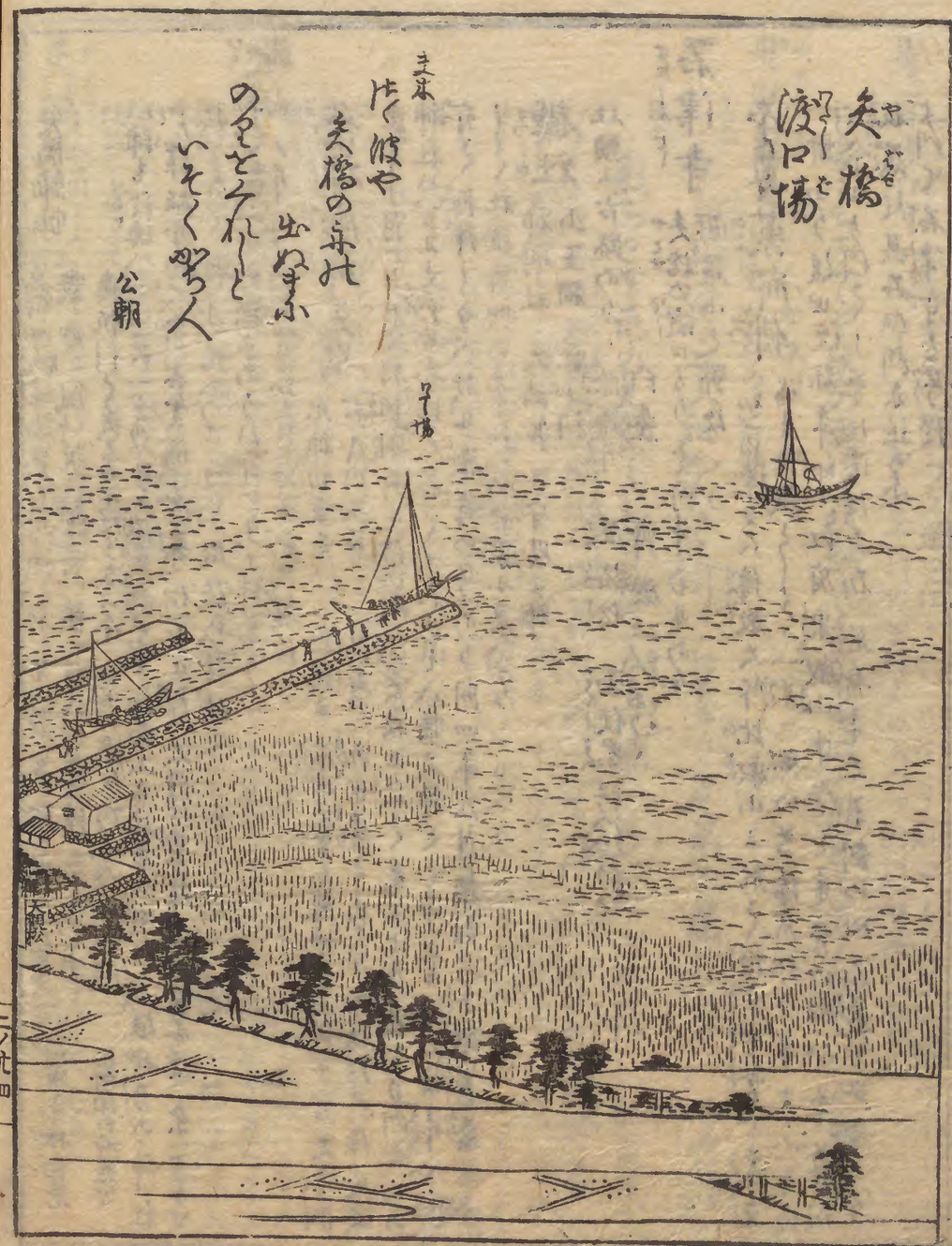
二躯の尊像ふ似ゝ本ゝ

公命ふゝゝく上堂に遷ゝ又初ゝ延暦寺を系創の時伝本尊ふ

投棄ゝ其石伝所ふ止ゝふ

ゝて石津寺と号ス

矢橋渡口場



さく波や
矢橋の舟は
出ぬまを
のどをとれとと
いそぐ船人
公朝

朝照や
矢橋の渡
もるる舟を
いくそうひ
せきの橋ち
兼昌

鞭崎
八幡宮

石亭

栗太郡山田村（北陽より三十町許西の方）

山田渡りの村中に水門小路と云家久しき村落あり此人生得彩筆にして和漢の名石を好んで年来諸国を尋ね恒石の形端風流なるを庭に松樹を樹いさて先ある書院に石階より外雑話に楽しむ席上より遥に見れば湖水霧花として日枝の高根庵湖の松真堅田志賀の都は湖に沖に山田矢橋のつゝ私行々しく

みふか山亭をとてふかしもとる石は神代の勾璁にて我国諸州の産人の国は産出る石化石大物の爪水入の紫水晶ゆゑの基に飾て又小箱に入て錦を敷く

塗籠に家蔵をる事都て三千餘石あるゝを所謂晋の石敢を叩き陶潛が醉石に外雪徳が醒石に況く自に日に朝に夕に人に愛に海内其名を聞く四方好事の紫貴とかく様と形くあり驚に枕く数の石に見る事多し

予も巡行の席に立寄て石に観る人の負に入出

和漢の石にあらざるゝ茅屋に登雅し

故に見所の土産をあらに圖をるの

山田石亭翁ハ
古今の名石家ニ
あ石怪石数ヲ蒐
都て二千余種ありさ
ヨハ其子の二ツ図
をるのごとく海内の好事
ありてのまゝ
観こゝ絶景ハ又他
邦よりも特秀り
ほ丑藩どる楽し
みとて左傳
師曠が石能言
くハ此石亭乃

濃州産
月珠石

羅漢石

加州産
亞曜

濃州金山産
鍼松石

春泉齊

家寶ものゝ

濃州産
石膽實

琉球産
石柏葉

琉球珊瑚

鉄樹

濃州産
菊子花石

石龍子

石精芝

草津雪景
白井直賢

ヒグチ

歩倦驛亭遐
茲休賣餅家
出門還跨馬
到處敲吟牙
熊谷立内

上田友汀寫

琉人泊
草津驛に
觀駒井
氏之活
人石
中王
山

石郷ヲ七武里半七町駅中ヨリ北の辻あり右へ曲ル東海道より直ニ北へ
ハ曾海道中仙道名護屋道へ出ル 大倉系は馬上の轍と名ぶくん

近江 草津

立木明神祠

宿中にあり系津大倉の生土神にて例祭に月三日
神人小堂氏 別当番賢院
祭神 加州春日明神ヲ同じ社傳云神護景雲年中春日神鹿に乗り
和国の時に此地の立木の桃に始て遷座あり依て後和州に移て今
常善寺 は駅中にあり成菩提院と称す 宗旨 初ハ法相中古真言
今浄土宗 永禄 和恩院ヲ属ス

本尊阿弥陀佛

産係長三尺余脇士観音勢至 厨子の扉ハ四天王
像の彩画を寛平年中巨勢金岡の筆なり 又厨子の
後の板画ハ弥陀来迎の柳瀬画く 荘厳微妙
寺説云開基良弁僧正天平七年 地蔵の時 菩提の衣の神人あり
考云ハ仏法弘通の精舎 梵釋と云ふ覺ぬ
故ヲ一宇の伽藍を建立しく道場に其後春日の神廟あり 来現
しく聖くあらく顕現 光仁帝寶亀八年天下大旱 勅ヲ以て雨あり中興興正菩薩
当寺ヲ住持 布施戒と貴賤 獲く
あり 後世布施を乞ふ 延徳年中 足利九代
将軍義尚公当国鈎村の鎧を出田村将軍の参附 再興ある其附乃
地蔵ヲ安置 什寶ヲ田村将軍の寄附 書写乃大般
若経三十巻 有後世補写 建仁元年の天福の年号 足利
立木の社 八幡あり 後ヲ醍醐 寺書院名
の 細川三郎の

活人石 駅中馬井氏の家ふあり高サ六尺巾ヲ尺五寸中くく巾ふし
是ハ海松茶のふし 辻堂の弊屋の屋ふあり
或カ云ハ石栗の化石 年代深
出る今ヲ土中 栗の枝
化石の銘を中山亞相公 栗の郡名
駒井氏 軸 家蔵
化石之證見 治郎代 醒編湖東 石亭 雅錄
根岩品類有数 属者 近江国栗本郡草津驛舍
長駒井氏者 持栗樹化石 来而丐其名且記之
方と獲審覩之 其高二 飯尺斧削痕存而不煩
琱 豫自然成亟崖層巒 於峭壁撲峰 勢尤
足愛 瓶焉 明栗里 頗石 名何若栗本栗石
奇不 悅月而適 已不 蹇ふ崩永世寶
傳應為一郡 雲領 矣今名之以活人
蓋栗子其功足以活人 字
窮因書以遂之云 丈亦宜襲其德於無
寛政甲寅晩秋 前權大納 言 藤原愛親

近江国栗本郡栗の化石を
ぬのうみ さうしの化石 利のむすれ ぬいそ とあらて世こたち勢形
徒一位資枝

栗津川

常ヲ仮橋霖雨洪水ハ歩ワタル 水源ハ金勝谷
流ル 末ハ山田ヲ潤ル 入

硯家山

月川と海水の間ヲ大木の栗樹あり 流ル朝日ヲ潮
ヲ新と模ル夕日ヲ伊勢治ふ 耕作の栗 硯神ひく

[illegible]郡[illegible]栗[illegible]郡と書く古の字は本とうぶ
[illegible]本の字は[illegible]ん順和名抄[illegible]

鈎古城 鈎村にあり足利将軍義尚こゝに城を築く麓を[illegible]ひし[illegible]
上洛の時[illegible]川村の西岡村あり

小野寺 小野村にあり石場山[illegible]年[illegible]と号す
禅宗[illegible]

本尊正観音 長八尺 聖徳太子の御作 開創久遠[illegible]
後迦世天和年中 [illegible]堂和尚再興に
本名六地蔵村にあり和中散の[illegible]庵[illegible]

梅木 是齊を本家とす
紀り

さゝ[illegible]ちりめる流の[illegible]源を[illegible]けたる[illegible]の梅の[illegible]
[illegible]村に
あたゝえ和の比梅の木あり[illegible]其木落みく和中散と[illegible]人[illegible]賣て本家と
[illegible]しいふ其初へ織田氏と[illegible]く和中散小児[illegible]の[illegible]
[illegible]堂あり本[illegible]
[illegible]大尺[illegible]鎮[illegible]
[illegible]宮[illegible]の中[illegible]
[illegible]
[illegible]

茶津
追分

茶津
夜
曲
東海道
直
岐岨路
名護屋
中仙
東海道
中仙道木曾街道
春泉齊

新善光寺

高井郡林村にあり
浄土宗 鎮西派

本尊三尊弥陀佛

長さ八寸二菩薩を左
伝州善光寺の如し 紺宗定とは解く

寺流云仁治年中山地小松原門紺宗定といふ武士あり 毎常沉湎して極楽往生成つるを願ひ信州善光寺に四十八度詣して 一夜の夢に三尊仏現を右の手に施無畏の印左の手にむすび端厳微妙の光明菩薩も共に寶冠を戴き般若の音をとなへ 感涙を流し寺僧に問ふに是紺宗定の出家の姿なり 感涙を流し寺僧に問ふに是紺宗定の出家の姿なり 故郷に帰り一宇を建て新善光寺と名づけ

石部

近江

石部の海道にて石部の金山といふ人家の上道八十丁お間ノ下道へむかふの横田川の流あり

石部の金山村にあり中古銅山坑口あり

鹿鹽上神社

駅中田村に鎮座延喜式内二社下の社に吉彦四神上の社に吉彦四神土人虚空蔵と称す亦神

後漢世記に云ふ 生土神 例年四月上巳日 驛中の側に分て社あり

金勝寺

金勝村の山頂にあり 聖武帝の御願なり 二王門 鐘楼 僧房 良弁僧正の開基なり 後世稚児殿と称す 釈伽如来と観音一尊の津

閼伽水調貢

海年正月十五日 禁裏中粥の供に用ふ 昔ふかくは十人三山に出て 過て流れ改め流れの里に入り 汲て水丑走りて散り故に其水と号る 洛の五川といふ詳なり

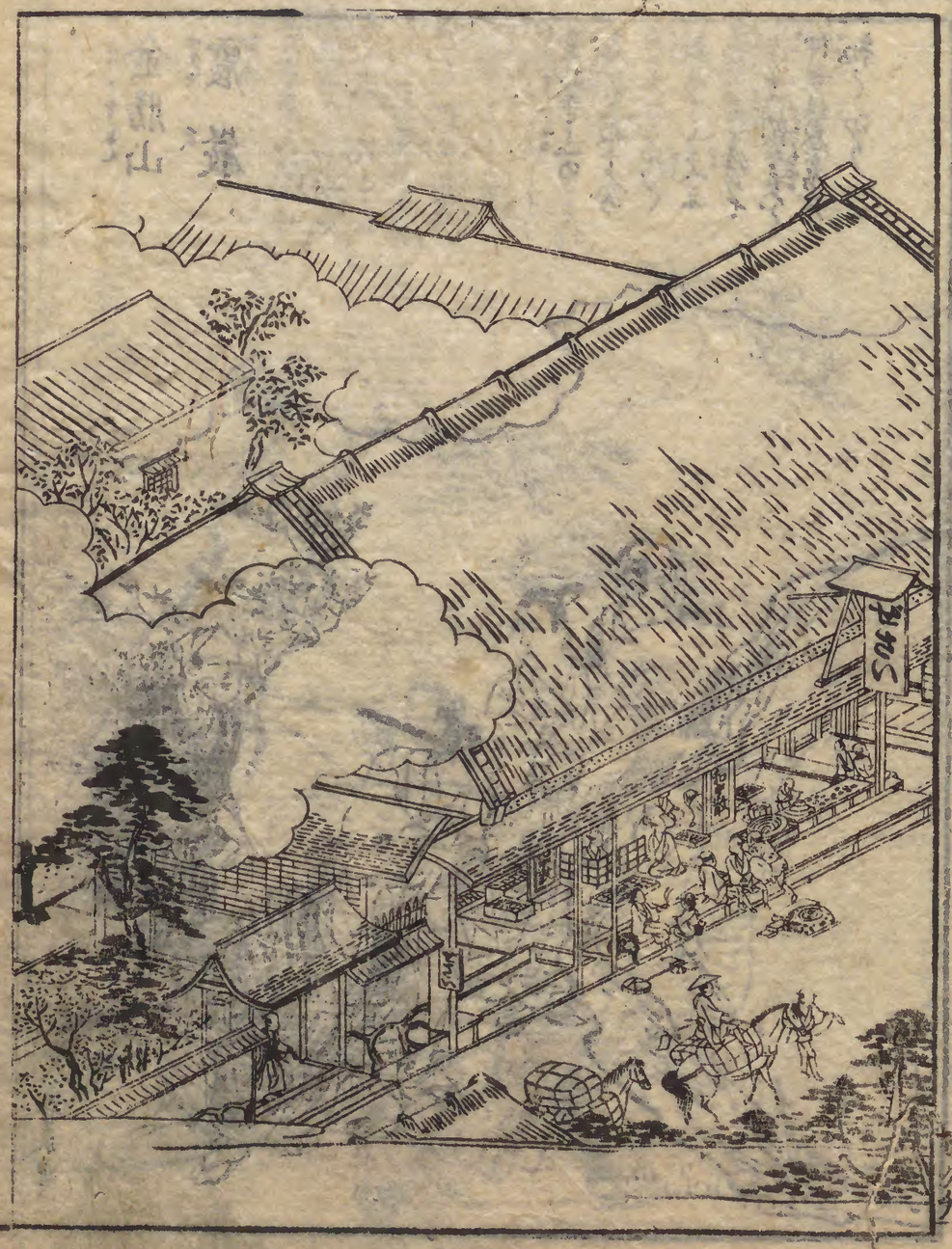
震巌

宮ヶ谷安く 新くあり これ亦もの奇異

目川

目川といふ村の名あれど今は名物の菜飯田楽豆腐なり名に聞ひて目の園なり目川の店もあり豆腐百珍の一種とあるもやれが全盛なるべし

梅木
所の名れ梅木沢
氏れ多うふゆゑ
家の名れ是所と
なづけ名しなぜえめる
或ハ
小田原の外ゑ乃
たぐひ有しんう



金勝山
震巖
金勝山の震巖へ数十人のちからかりて動せんとすれ共僅に拔頭とのみ押すれ共震だ動くのみ
春永画

揮塵錄曰宋の政和年中處州縣より一巨石を貢ぐ高サ二丈余千丈ありて成群ども動ぐ或人のいふこれ神物なるべし表帶をぐ故ゆ題して慶雲萬態と号して金帶をかけて其上ゆ掛て動とゆ須臾にして花中ゆ至るまでこの類や比せん

阿弥陀寺　金勝村にあり金勝山と獅子峰土宗恵しく山中奥くしうへ金勝七谷といへ幽谷風致の地と

本尊阿弥陀佛　文明十八年宗真上人の建立足利義尚公寄信あるて後土御門院へ奏し勅願と賜へ天正九年の兵乱に荒廃に及へ

西寺　甲賀郡西寺村にあり石部より十町南へ阿星山常楽寺と号す方舎の古礎多し

本尊如意輪観音　横門金剛力と安置堂形仏像古代の作なり奇雅

東寺　同郡東寺村にあり阿星山長寿寺と号す高槻の西南に阿星ケ嶽と

高槻　故に兩寺共に阿星山と号す

本尊地蔵尊　行基大士の作聖武帝の勅願所なり古代の仏殿今は

存なし　仏宝物　聖武帝の勅願所なり古代の仏殿今は

傍房多し　原　聖武帝信楽宮に遷都の時鬼門守護の寺と今信楽

谷に宮城の古蹟あり古礎古瓦多し

大石塔　堂あり高サ壹丈六尺五寸の形とし

聖武天皇の御骨を納めし所と伝古雅

鬼儺　正月十五日の夜赤黒鬼の面を被り鬼の舞とし式あり仏前の

鬼儺　正月十五日の夜赤黒鬼の面を被り鬼の舞と

太平記及び右堂檢遺小記に、弘法大師入唐より歸りて大悪の後、八年尊
〻此寺に住すと、一首の哥を添へ、

世のうそとよ[illegible]なれ三吉野の奥深くこそ月かけやどれ　義房卿

[illegible]年八十五才　遠忌の時、今は万里小路家使者あり、しばしば
[illegible]年小遠忌を遂ぶ、康暦二年三月廿八日遷化し

樋田川　田川村の東にあり、樋田川村の畧語なり、水源は甲斐谷の諸流會し
末は野洲川といひて湖水に入

獄門岩　川岩路傍にあり、相傳ふ、康平六年奥州征伐の時、安部貞任同重任
二人の首を京都へ送る時、役人ここに憩ひしと、

梵字石　通り山上百歩許にあり、相傳ふ、傳教大師、延元の二字を自書し
鐫りしと、樋田川の小岩根山にあり

岩根山善水寺　天台宗

本尊薬師佛　脇士日光月光十二神將四天王
傳ふ、傳教大師の作

大師堂　境内にあり　鎮守　六所權現を祭る　閼伽井　本堂の西にあり
元三大師を安置　本堂の傍　思川　岩根山の麓より出る　本堂の東にあり
石傳池　本堂の傍にあり　川といふ古編あり

万葉集　石傳の岩根の池みかく時なくこそ君をおもひそめしか

支那　ちかしふいそ白ゐん石傳の岩根乃池れ山吹のそふ　公朝

日　あしがのさわるる根の池あれば波も八代の数ふ川柳ん　佐頼

岩根山　[illegible]の最高所十二坊あり、[illegible]十二坊あり、其古礎あり　[illegible]法師
山嶺より遠望し、岩根の城作生[illegible]多景[illegible]神の書向石文
北麓の岩根日枝の[illegible]根半嶺の松山田天狗[illegible]石山寺谷上甲賀山
飯道寺山まで眺ふくべしとの[illegible]

家集　[illegible]山の[illegible]の[illegible]ら岩根の山れ岩乃松　後成

支那　久しさの[illegible]成へしを[illegible]ぬいろの山れ松のみどりら　家清

寺記　[illegible]　実政

[illegible]当山は　元明帝の勅願なり、和銅寺と號し、弥次厳石延暦中傳教大師
比叡山根本中堂と[illegible]、[illegible]山の良材を伐り、樋田川に流し、叡嶽に運
[illegible]其年早魃[illegible]の小水なり、大師[illegible]山に[illegible]石傳池に[illegible]
出さり其業を良業金留の四文字あり、大師昇池中を探り、[illegible]檀金を[illegible]す
八歩の業師佛と溝[illegible]、[illegible]尊[illegible]して清雨の法を[illegible]の小池水滿[illegible]
良材の小坂年尚麻浦に着せり、大師[illegible]梵利を創し、勅を奉じ[illegible]の業師佛を作り
金像の體中に藏む白鎮の字[illegible]醫王善逝の善水[illegible]善水[illegible]弥[illegible]

平松山美松

[illegible]
山美松どうつ
独一こゝゝ

うつくしい
松のこゝゝろは
たまさん
さゝかけ傘の
枝ぶりのこゝゝ

班水

[illegible]
優蓋山の
松はみな蓋なれし
松樹の中に松樹
[illegible]
[illegible]
[illegible]

水口 近江

土山より弐里半十一町 駿河北街道 裏町一五町 名物に葛籠細工の店あり 殊に釜安とうとん茶人御賞 山城より長東大蔵少輔正家居城故有て度々寛永の初今の地に再営あり 同十九年より御番城成其後天和二年加藤美濃守居城あり

水口神社

駿河西の方にあり 延喜式出城下の生土神と云 例祭四月上申日 祭神日吉山王大宮 衝撞

美濃都天満宮

城内にあり 社伝云菅丞相左遷の時四人の公達山陰卿十六丈の御時 湖水に流れ来せし 舟人の子孫も今美濃都村にあり 舟頭の家と云伝れり

蓮華寺

駅中南の方にあり 宗旨云田舟水口山太子堂と号し播州の因幡寺乃末寺 開祖は初め台宗天正年中の田光恵上人に帰依し今宗となる 長之天皇徳太子の御化寺記云皇太子巡視の時に霊水湧出 霊水

本尊阿弥陀佛

と刻て安置し霊水を汲て水口の号出る 其後神護系会の恵光押勝退治の為に一寺を創し太子南無仏の像二軀 基跡兆殿主の源見親吉武将軍自筆の歌書を賜へ今是想国師の又小坂遠州ちくれ来り庭中と造る今度一石の一存せり

大岡寺

駅の東大黒山の麓にあり 天台宗龍王山と号す

本尊十一面観音

長之天武天皇白鳳年中の建立 林五寺縁宮の御本尊 鎮守は飯盛明神と記す 寺説云当寺は 天武天皇白鳳年中の建立 長之帝勅願 兼家の守本尊 として山甲賀之帝勅願 猛々しく山神之化を鞭撻 其怒念手 人間に成仏せり 又門前の標石に 大悲の加護 長明の奮跡と 鐫次

長明海道記に 扶系に大岳として 年代 髮をそりなして 山の表曲に時ある事を楽しての詩に感じ 山大岳の笠に 霜の笠に 紅葉の 紫道の 事に

○按るに山書のそれぞれ奥應二年とあり 東鑑に建暦元年鎌倉に下向し 将軍実朝に謁とあり 後に八十三年後 方丈記に建暦二年 醍醐日野の山の奥に山居し 方丈記を 作れり 然るに 四海道の記の文章の風調 相違あり 他人の記と 其疑書を 長明の奮跡と 云伝 半巻 漏出 又按に 百練抄に天仁二年二月二十七日 為義 於 近江甲可郡 尋得 義綱 於大岡寺 出家 廿九日義綱 配流 佐渡 義綱 賀茂沢帝 義綱 虚命 公蒙 太平記云賀茂沢帝義綱 其日に帝 宿義 勅 其日は 樋田川に陣 軍の 山等の賀茂沢帝を 流 又長明道の記と 明日已の刻に極むと云 長明と云伝 伊賀守 従五位下 藤光行の 惟中 績無名抄に云賀茂長明道の記 長明 仏 東行の 源光行の 人考 亜名抄方丈記二書の 水 方丈記 の

遐齢山飯道寺

水口より南 三里 天台宗日光門跡に属 飯道神社

本社飯道権現

延喜式神名帳云飯道神社 神躰 熊野三所権現

本堂 某師弥陀釋迦

大師堂 元三大師と

弁財天祠 十二神将を安置

当山金剛院は安置する像は弁財天山王と織田信長の持尊と

和州信貴山城を紀州へ移され

其時当山の衆徒加勢して働仰あり其恩賞として山尊像を賜る

山林の竹を伐採

故に地主の神くに

大黒天像 初は蒲生郡物長者の持尊なりし成当山を納て鎮護成

御堂に諸堂建立ありて毎月毎日院中をめぐり

守護に山王祠 本堂の傍

白山権現祠 山王の傍

蔵王堂 山の中腹

末社十八宮 当山所々

影向石 本堂の上

護法石 本堂の下

龍池 本社の下

閼伽井 閼伽井谷

錫杖 南谷小白鷺の神の祠あり首

杖樹 水口道の傍

足跡石 傍に向石の

石南畧谷 谷小石南畧谷に作樹大樹多し満谷

道標石 八合比丘の造立あり

山伏落 本社の後山所より逆に落をとして

抑当山の開闢は 元明帝和銅七年八月十五日大童妙相成現じて甲賀

郡髯嶽に霊宝鍵を隠し 新向にまた齊宮にまた入り 然聖権現の

霊告成蒙り当山に真若小云飯と盛る形路傍小祠ゆえ

齊宮の登山まで小椰の花飯と盛る形路傍小祠ゆえ道の標まで堂宇新

向石の側に然聖二石権現と勧請成故に飯道神社と号次厳后 聖武帝

信楽宮に遷都の時附王城の鬼門守護として天平十五年八月南都

興福寺の安皎法師登山して伽藍を造立して南都の霊場とす

文徳帝の御宇に飯道神社に位官成授け礎砌の聖賓尊師徒

当山若本坊梅本坊和州大峯に随身供奉して中興に成時九月五日と

今に至て毎年日数を負て社参に渡る成例式となる成渡しとして

当山の開基は良辨僧正安皎安峯二世相続て住職して中興は光定大師と

慈覚大師の近衛院の安年中飯道権現の勅額を賜ふ 今宝蔵に時甲賀

徳の惣社と成織田信長に初頼る信あり登山して寄宿一宇ひく

神領を寄附の事古記に見えたりされば山大峯葛城にひくとも勢

峰嶮しく老杉茂鬱して梵宇寂寞として苔蘚蒼く丹青の旁の雖

に空しく見えしも神徳はむしろ今も変ずにとどまれり

国立公文書館
National Archives of Japan

山上庚申　水口より南き里小山上村あり三丁登る半十八町山頂ハ
一宇あり瑞應山廣德寺と号す
青面金剛童子　伝教大師の作岩面ハ鐫こと延暦年中大師比叡山根本中堂を
造立せんとて甲賀谷に入り良材を求む其時あれ鐫ものと
甲賀谷の一名杠谷といふ又碾之尾といふ民村ハ大師初て伽藍を建ものと古跡
あり又杠川といふあり水口横田川へ會に
辨慶背競石　水口の東北里小里村の景清力競石あり同所ハ義經腰掛石あり
左の方山ハ稲川の側ハあり熊宮の紫島くあり右の三石ハ清水共に
義朝洗顔水　渡人の云伝ハ
右の前あり山口志摩重成の墓と慶長中の人
山口重成碑　碑文苔打して鮮あらず延宝年中ハ建る所く
慈安寺　お安村ハあり運宗宇治漢蔡山の末流
重德王四十二年の作像あり林丘寺宮あり種々の寶器と鞠人什物あり
杠尾川　杠尾村の端ハあり一名内白川といふ土山の田村川と
水白川と号く末ハ横田川へ會に
曙記
若狭の子と名付て色に出早くも松の小川乃水の底ゆく　光度に
坂の下きく式里半西立場ハ多賀の神社へ糸佐道の標石あり
十一里へ宿中ハ半頼文皇社あり名物ハ獅子田村川といふ名
酒と賣へ家あり
土山　江　迫
土山の駅ハ東ハあり驛中東の方ハ生土神こと　國更
田村明神祠　例年正月十八日　鈴鹿糸四月八日
祭神　中央ハ田村麿　相殿東の方ハ崇神　西の方ハ崇神

第地堂　千体観音と安置　末社　稲荷　天照皇大神　神樂家　西ハ三町
神寶　田村將軍ハ左右ハ二鬼ハ従者　端殺表神　笑鑑　又玉簾一無あり
捲物將軍家より賜る
珍瓏たる名品あり
主当社鎮座の年歴同記ハ所見ハ往昔延暦年中奥州安部高丸王命
ハ叛くに田村將軍退討して駿州清見関まで追ふ合戦の時清水
観音霊験の事あり又一体和尚ハ盜をゆるの時強盜ハ遇の事勇壯記ハ
あるまつり田村の謡曲ハ田村丸能鹿の鬼神退治の事ハ能とを附會して
神祠ハ建るとあり　或ハ云ハ天正の比ハ織田信長生城の時田村川
遺のむかひ今の往還の北ハ古道あり双方の松ハ
の鹿山の鬼神田村丸退治の事久しく世に云あり今ハ里人安土街道
迫郷ハ小路ハ路傍ハ祠と抑田村將軍の傳ハ續日本紀王代一覽元亨釋書等ハ
建しとあり
又ハ詳ハ記るハ建ハ田村麿ハ　桓武帝の外戚ハ忠肝義膽の人
且勇威ハ一度眼を張て怒ハ猛獸も身を縮め四足を蹙む一度笑ハ
幼児も親ハ慈母の懷を面貌赤くして髭長く関羽の如くして丹鳳眼

鬼共従ふ事しかり。古に多くすべし。天智帝の御時逆臣藤原千方が金鬼風鬼水鬼隠形鬼の四鬼共隨く伊賀伊勢の間に立て王命に背く紀友雄に詔あり。千方を討しむ友雄一首の歌を詠て敵軍に賜ふ

某も未だ知人君の國あれをいばくら鬼のをみちある角に

鬼等あれと唸て感動してみかちるく去るる千方勢を捨て友雄に討亡ぬ

役小角が呪縛して赤鬼青鬼を従へ源頼光が四天王を連て大江山の鬼神を戮し

渡辺綱が羅城門に鬼の臂を斬平維茂が戸隠山の鬼共誅に山田村麿が延暦十六年十月従四位下征夷大將軍に叙し弘仁二年五月大納言右大將と成て

逝去に年五十四　天子二百余園に入せ給へ唐魏徵に比し凡骨の后と古墳に山州

山科の南栗栖野に葬り若羽山清水寺に坂上田村堂と称し奉へ原田名代高

産に入る産神ともいへ故に産明神の宣命あり神威霊験日々に彰あり

泰富の宮殿東殿西の旅人豆寿て参る給ひ給へ宰相

田村川　和泉国信太森の山中に流れ会し宋の河川と云

松尾模田に

鰤坂

（城陸奥賦の模り）鰤坂と云ふ名所の嶮岨なる所の山賊盜賊人を暴逆せり山名所又鰤が塔とかの山賊共を捕へ誅ひ

名あるく名所多し

狂歌

りはん道を頼む山中の岩の上に横たひ

光房卿

迫野国博

澤村立場の入口に迫に侯野

鈴麻山

坂路八町七曲一名多津加美坂と云

拾遺

世に古れしかも城なり迫麻山むかしの今に成るあるらん　安宮女御

彩古

なるらんにうたかたに成れる捨くいたに成れ我身あるらん　西行法師

風雅

下紅葉いろくふかるをぐら山時雨のいとくこれはあるべし　能宣卿

鈴麻関

所々に関所あり一に麻関今の関驛も山関の蹟と云ふ

千載

ふる雨ふかさえわれもをぐら山岩こす関の戸さし成なん　同大臣

彩拾

ぬる捨くれしあんをぐら山関やいかれ月も守ろう　基俊田氏

曙記

今宵いとこの驛場を市興とぞめら其の下れ来にわれくもて低麻

の麻路能宣の嵐はさをれ暁月の新さえく玉の色もみえに　下野

石山
田村明神社

田村將軍
鈴鹿の鬼神
退治の事へ
実説の〳〵
ごとく〳〵
久〳〵世の
人口ふ膾炙
をくるまで
これ観音
の仲力

観音の千手
夫こそたが
為と成
酒くらひて
鬼殺し〳〵

国立公文書館
National Archives of Japan

鈴鹿神社　鈴鹿郡　佐原郡　佐原山ふもとあり延喜式神名帳ふ行山の神社
坂下駅中の生土神例年二月八日
佐原川ふうさけつれい神路山榊葉多く出る月うの事　信正行恵
祭神三座　中央瀬織津姫命　左右ふき吹戸命　瀬羅津姫命
相殿倭姫命
鈴鹿社　ふ神門外太神宮天神地祇　攝社　山祇命　稲荷
愛宕
頓宮屋　邵懐の右の方
彩勅　神宮郡りのもとうれ祭宮ふく旅の奇ようみ侍々
いそぐくも々ふいと海〳〵ん旅祭とる芦の町ふ和葉散々り　權中納言通俊
羅山ふ神社考云当社の傳記いむ〳〵天智天皇御位と皇弟淨見原親王
小禅〳〵せ給へ然ふ皇子大友軍と僞て清見原宮紙蘿ふ皇弟吉野に遁
隠ま真くり伊賀国を経て山ふ到てふ山に紫の居と結ぐ翁と姥あり
皇弟ふまふ宿〳〵ふ翁はぐ〳〵と見まり君ハ王位龍顔ふ似給へ
ひとりの姫を持りまし君小相似て其相貴〳〵と皇弟ふまふ則寂愛
有て我ハ先帝の皇弟淨見原親王と大友の乱を避て吉野ふ到ると宣ふ翁
敬礼〳〵跪て云皇祖　天照大神五十鈴川の上に降給へ君ハ其後裔ふ〳〵

こふ住て祈ふ〳〵昇給供奉して治〳〵ふ大雨頻ふ〳〵て鈴鹿川の水漲出て
海ふ半ふ流ふ時小鹿二頭ふて首をうかゝ出て小栗て安〳〵とつてうふ
あれより會鹿ふのとりて山ふ翁ハ今の祇神ふ〳〵厳后皇弟ふ美濃国に入ふ白鳳元年
東国の兵ふ紀〳〵大友皇子を滅して天位ふ昇給ふ成　天武大皇と申る
八十瀬川　一名佐原川　海道の左ふかゝれ又右に流て
彩勅　彩勅もある也八十瀬の名あり
うう初くいくうふうねをぐら河八十瀬も多ぬ六月ふの比　俊成
詞花
六月ふの日紙ふる海くに佐原川八十瀬の流を立ぬさうる　治部卿
玉葉
をぐら河の八十瀬の波いつけもせくつゝぬ袖のぬるゝ比の事　摂政内閣左
彩後古
すぐら川氷やせなと成めるん八十瀬の流も行やらぬ海く　源八幡宮
曙記
八日天晴卯の時ふうふをぐらと立川波の波芳ふもとぶ月光宗小吾紙うくつ
をぐらのとゝる氷ものうかく八十瀬うち出る波のゆゝ　光長卿
琴之橋　佐原社うう毛町祥東の方れ石橋とらゝ又坂の下駅中東の入口北橋成も
又関駅中にも同名の橋あり
支林
をぐら山橋の古木れ九木橋ふ〳〵琴の音ふ〳〵〳〵ん　俊成

鈴鹿往

後ト
もてうら
明方
ちろ
天のかと
うり出て
ほくとうと
春信雅有
本社
香紙
橋殿

仮の小社
騒ゆる
大竹小井とて、
大たなる
旗合わう
こんぶ俗
本陣脇
本陣あり
五老井
洋六が
旗の賦
上原小書院

麻油屋の
大のあたり火燵
やてうちけつく
門口の入湯桶者ハ
隅くまで
輿漆ぬハ油
らんつれなど
者つくろく
又治荷が
旅人や
暁やとの
仮宅

筆捨山

狩野家
筆捨
所
捨心
圖
無法眼

伊勢坂下

給鹿坂下と関すでを里半に駅いあり八幡社の下にあり〻〻慶安の比水流
ふりの人の地を移に此宿の教陣の家屋くして世を名を一天正年中より
あに住〻く小津田六帝といひ其後あ松孫太帝の代に絶く慶長年中より
今の高屋氏尾別より来りて家ッく相続に
此宿のあれ方に岩窟あり〻く中ふ三躰の石仏を安にあれ〻此駅中法安寺六世
密厳和尚元禄年中の造立なり

茅捨山　一瀬川の巻ふあり海道の左け方へ禁ふ八十瀬川を帯く山頭所〻ふ
巻あり其間々みか古松あり〻て枝葉屈曲あり〻く恢り松のなり〻年名へ
岩根山といへ里諺云ねせ古法眼東国通りの時此山の風景を画にうつし
てんやと茅ふとるふあく後ふ建ふ此山間に茅ふ捨〻とぞ
されば此山禁ふ八十瀬川を帯く蒼松の穂色濃あ〻く苔の岩所〻ふ多〻ひ
て松根あしの石に曲を撓らしく恢り樹の如〻朝あ〻〻ふ琴瑟の聲孫疾
の雨凄々くう月の影ふ龍蛇の形をあ〻〻鶴の声ふ若子の徳を表に禁る

秦帝の西を流を花ふ宓妃の玉を老ふ此山脈はたく岩根乃東方に
大黒石軽子石観音岩女夫岩ふど形をとりく名ふ呼みか山腹にあり
此石街道の左方あり〻〻山岸をあ〻ふ狭ひ落るを老ふ向へ中く
湯杖嶽嵐々と聳て風色斜あ〻ば吾妻の通り泰官の貴賤ふ〻に
憩〻く時ふうりをの彷地と

伊勢開

亀山へ七里半駅の入口ふ古城あり関氏築〻〻へ此所ふ関あり仙頭子
関守第の古跡あり又石の方ふ伊賀大和の街道あり此所ふ加藤弼と〻〻元弘の
後醍醐天皇笠置城ふ籠ゆ〻へ対東軍陶山小見山此道より忍て皇居に
裏より教討せ〻道と宿の左ふ観音堂あり此宿へ引火奴の名あり

彩後古
をくらふむまを伊ひふ開紙くいくりにあり此乃を　祥月法師
紀り

あふをうらいはを遠く屋を屋にをふ　お村は
恵横櫻　宿中氏家のお載にあり〻〻の街道筋〻〻〻迎と通り〻〻〻此道筋
彩後横　井口氏の家ふ假夫横と〻名酒を〻〻へ假夫へ謬あ〻〻ん
えぐるあれやをぐらの関あ〻〻んをり捨〻を花乃法ふ　定家

九関山寶蔵寺地蔵院

関驛の中向ふあり　真言宗

本尊地蔵尊　長二尺六寸彫正刻基の仏座傍に焼内ふ
寺記云　愛仏堂　鹿堂あり
安元天皇人平十二年の比海内ふ疫流り〻て人民ふれ多ふ亡び彩基ふ詔あり〻く
速ふ病難ふ救へ〻〻とあるに地蔵尊ふ刻て病悩除滅の加持一七ヶ日及び
貴賤ふ地蔵の名号ふ唱を護法の印を彫刻て著施〻〻へ病患忽ふ平癒に
又大長元年の比ほひ應寛僧都〻〻〻徳り夢に刻者あり此地蔵尊の霊告
を蒙て夢ふ眞途とあり〻へ地獄の猛火変〻〻く青蓮華〻〻現を金華

の罪障悉滅し則一印を授るあれ光明真言の正中へ應宣爰貴く感涙
夜の袖に浸されよう霊者に任く有縁の衆生に與へ今の六道の裁判
あれく延長五年ゆへ別当阿闍梨宥應に示現ありて曰く我閻提救世の悲願
を發し六道化と成く在悪の衆生に友とし故に往来の汗陌に遷とゞ
しと称く於是鈴麻の関屋の側小堂と号く安置仮中に洪水して山崩き
し時関駅も訪く改め来邪く九ヶ度に遷ゞ故ふ九関山の号あり中古此
号儀盗賊の為に行方知れず其後の別当獄穀を刹く本座に還しめる事に
頻に祟る怨示現あり又遠幽白子の浦に来り早く速ゆせと霊應あり猶ゆる
其曙ゆの浦の漁人来り云近江海上に数々光明燿々あり真光に慕ふ
網に小を地蔵菩薩と貴徒驚て護し本座に還しを仏霊験
古今に言ひさしの人語して関地蔵と敬礼しくるゝ
一体南云 宗堂の一体和尚古に縁年久しく馬蹄乃塵
様に荘厳裏蝉しめれい里人集りて仏像浦しを見て
世来の傷け来ゝ一体仏足つけく閻眼を頻しいと
閻眼供養をゝ

向ひく行のて茶いかくて
釋迦いまだ弥勒ゆいまざりそぬ方れ四ゆ地蔵
とゝみく小便をおうけく通りゆ(理)人安うぬ半うると入ふいう九閻眼
供養と申を半い威儀正しく絶とも具外さゆぐの他若めるべき
半あるゆ四ゆけもあたゆよみちゝしひ清めくゝ入ふいう
傷ふと人ゝ閻眼を改めるゆの傷あ
僧仏やとひく閻眼を改めるゆの傷あ
製裏ふ産に具とうそ(れ)精の様数をあ
半ゆよみ高産に昇を裏額の証あ
つゝき右と出しく地蔵絶をわく
仏所の老男女いのちい物利天の天人ふひしく
ふゞ(ゝ)右のうれひい具名をもさかゝ田島い穂に穂さうゝ雨月の組もかく
大雅れのそれもわうゝん海
たゝい大数弦盗ありしいもけ
あんどゝ半仏をろくいひちゝ
ゝれを就人ゝれらを海ゝの閻
ふゞ四ゆ地蔵とうゝ
いく名傷のく名ふようく国
供養ゆ海よいしゝるぞやゝのぞゝ
物ひゝ名ゆどに人ゝ番ゝく一体杉尚と
ゝく業名ゆく逆(仏)獄ひゝれ
示をこ返ゝあく仏懺悔禅をゝ
海たたのけゝいひゝゆゝを
ひゝゝゝれをたちゆち祟ゝを
ふゝゆゝいひいれ
ゝぞゝゝ海

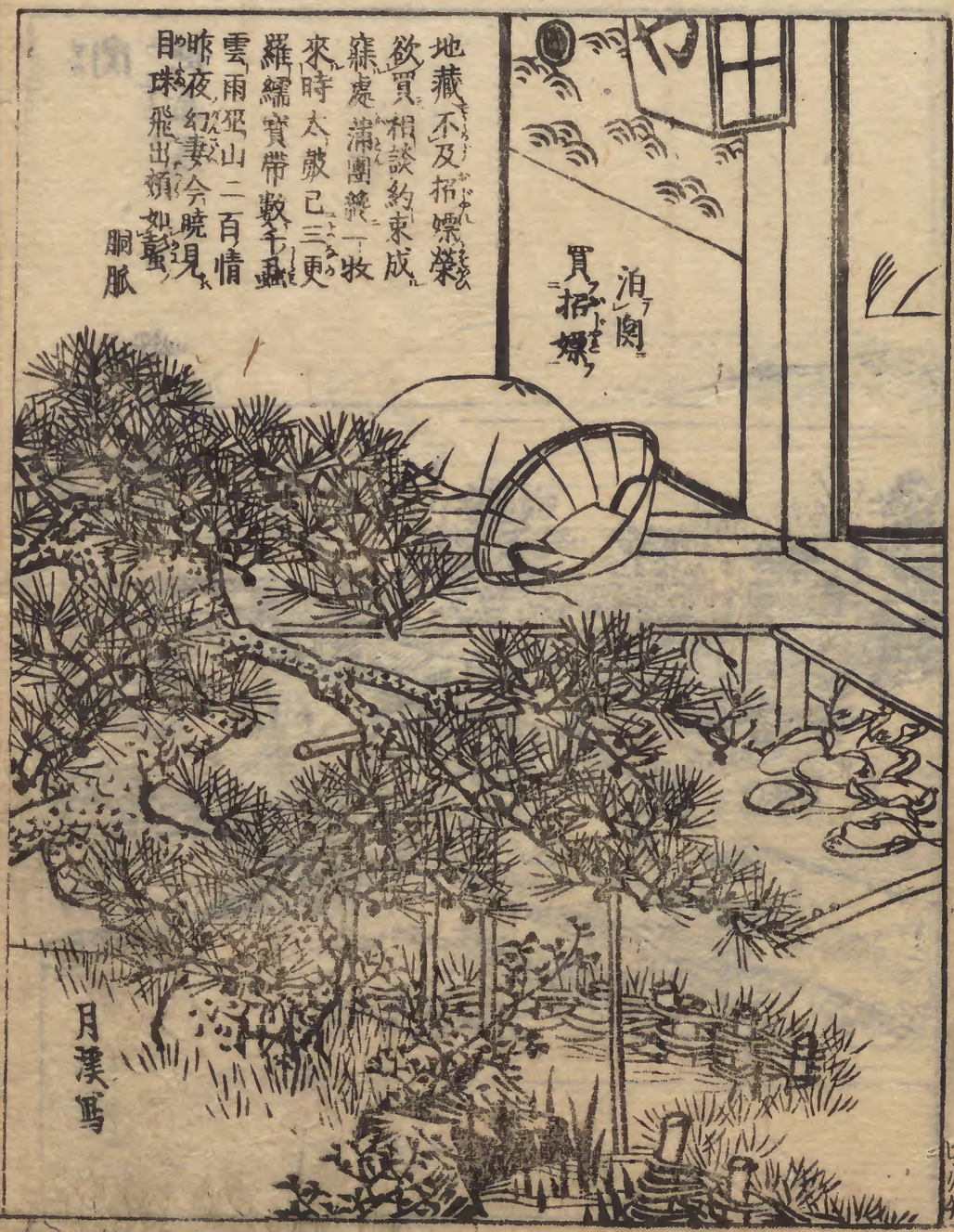
馬士の桃命ハ
常ハ
変態ハ
芳ハ馬ハ
夢ハ
眠ハ
芭蕉の
かくの細道ハ
月日ハ百代の
之客ハ
旅人ハ
生涯ハ
馬の口
えて
老を
ひゝふる
おゝ

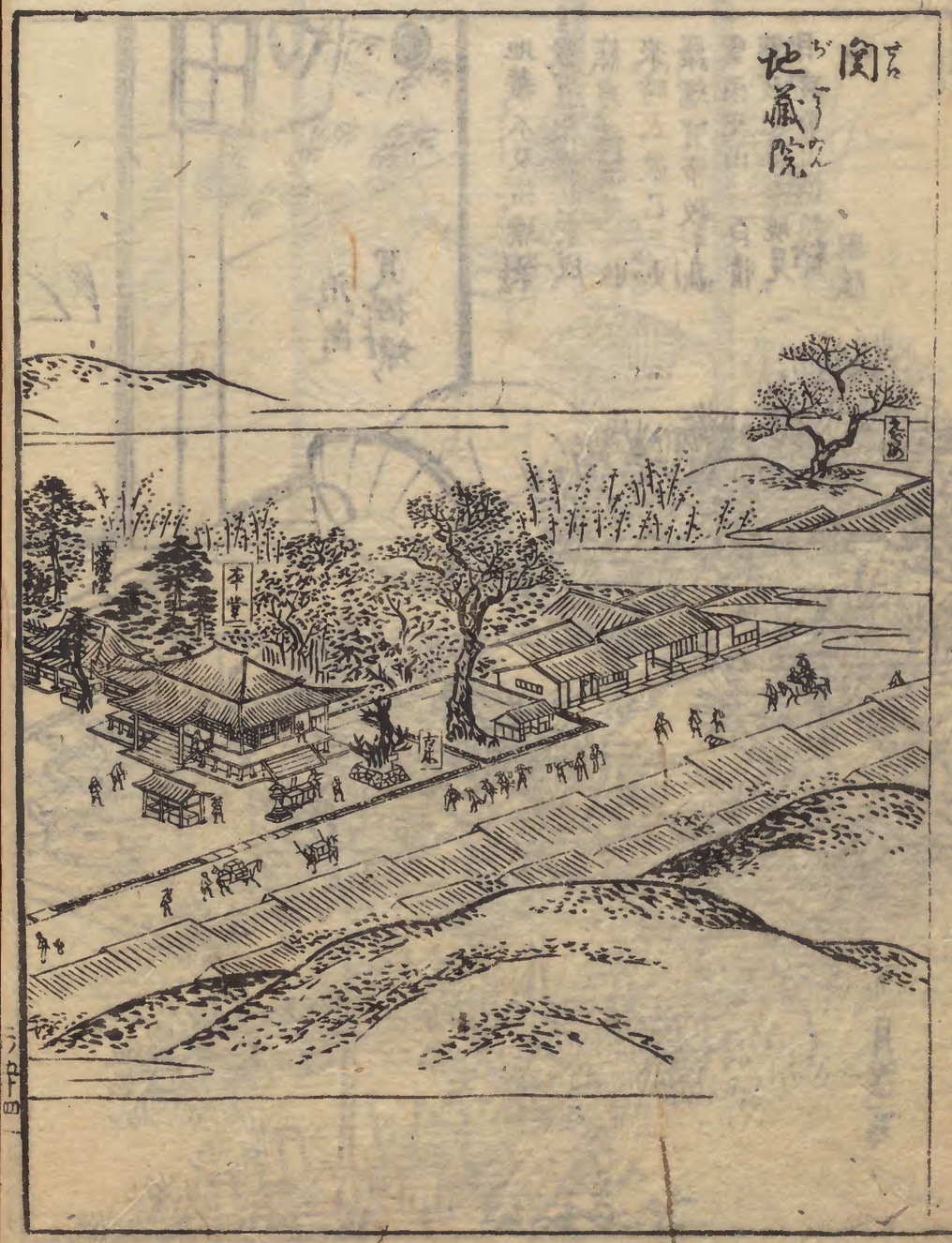
日々
旅ハ
旅を
栖と
ゆゝ
暮れ
の
時分
ゝ
あゝ
し

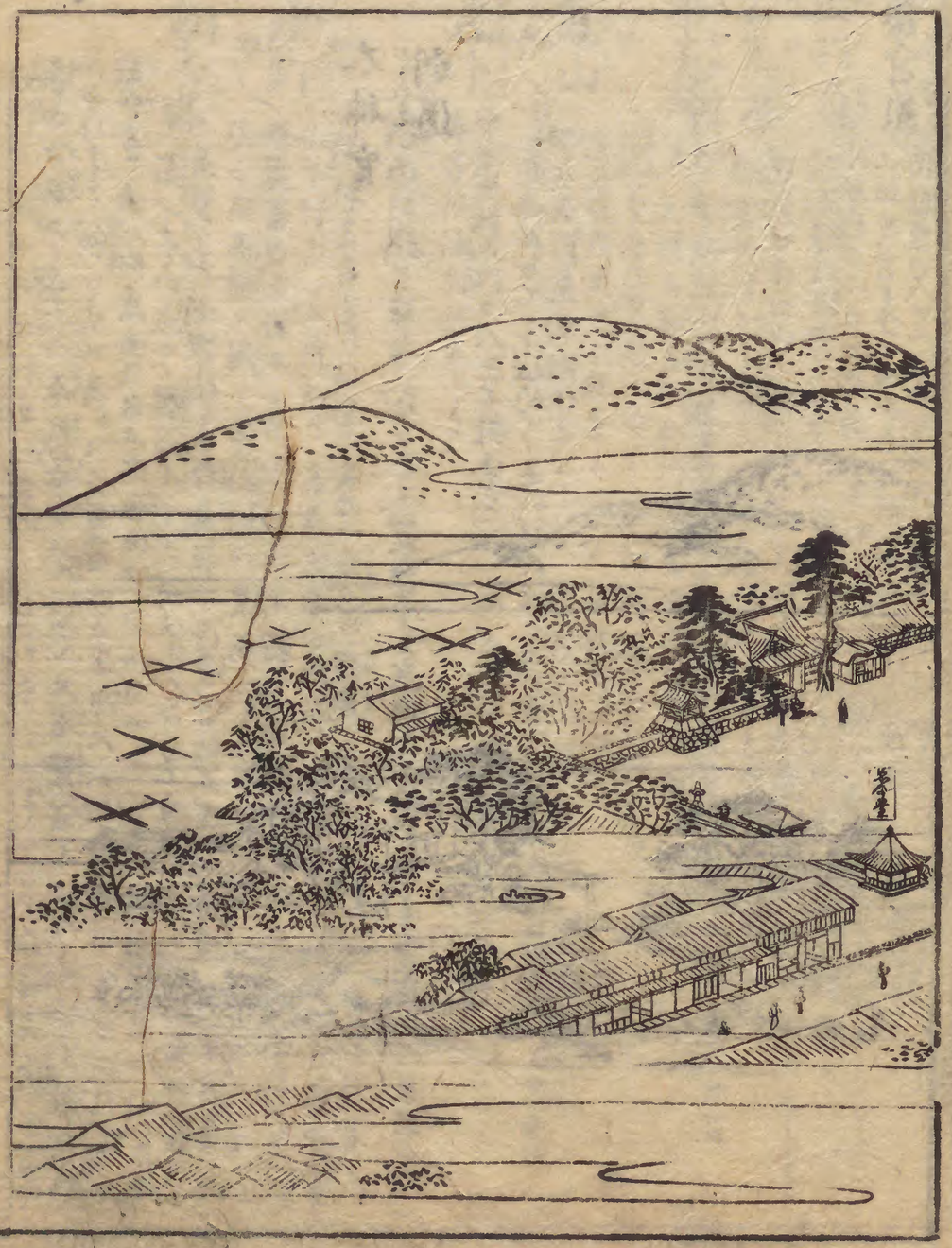
大参議
月参議
議
議
議

維慮寫

国立公文書館
National Archives of Japan


地藏不及拓嬰榮
欲買相談約束成
羅處滿團綾一牧
來時太歌已三更
羅繻實帶數千蟲
雲雨巫山二百情
昨夜幻妻今曉見
目珠飛出頭如蟲
胴胴
泊園
買拓嬰
月漢馬


関地蔵院
本堂



太神宮
別道

参宮道 [illegible]縣東の入口ふあり 糸師及び[illegible]伊勢参宮の案[illegible]
山田外宮まで十四里 名所神燈[illegible]
出羽森 小俣村のふたわき森あり 勾川羽黒権現[illegible]羽黒山と
出羽参宮道あり 勾川の[illegible]寺縄[illegible]十八町あり右に[illegible]
古馬屋 [illegible]川の南にあり村の名[illegible]天照太神五十鈴川の上へ遷座の[illegible]
神馬[illegible]ほうがせ[illegible]人[illegible]里の名とあり
布氣神社 [illegible]尻村ふあり延喜式[illegible]皇館太神宮と称ぜ[illegible]
天照太神五十鈴川遷[illegible]の役宮の古趾と
庄野 [illegible]式里 亀山市中[illegible]十七町[illegible]
慶長の[illegible]岡本下野守[illegible]人居城せ[illegible]
亀山 伊勢 今の石川[illegible]立城ある
[illegible]亀山[illegible]ふあり[illegible]
森下 中富田村の門[illegible]八王子祠あり
海道[illegible]向に走り
[illegible]に風[illegible]
石茶師[illegible]七町山[illegible]の名ふい[illegible]入の[illegible]
植[illegible]村[illegible]所あり名馬生[illegible]
庄野 伊勢 の親名の示現[illegible]所の出部[illegible]
佐々木高綱小[illegible]宇治川の先陣[illegible]
白鳥塚 [illegible]十町許東[illegible]麻郡の内[illegible]宮村[illegible]
陵の[illegible]拾八間東西弐拾五間南面[illegible]
[illegible]神の方に高[illegible]東西六[illegible]
[illegible]の古[illegible]奉[illegible]家[illegible]
[illegible]の側[illegible]家[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の

諸土人ホテ悔トシテ又陵道の傍に石造の小祠あり尊の皇と祭り
ゆく所笠堂と云今多度権現ホ然ホ又其南ニ然所権現の
在し所なり

古事記曰

日本建尊自阿豆麻幸行而到能煩野之時思國以
歌曰夜麻登波。久示能麻本呂波。多多那豆久阿袁
加岐夜麻基母禮流夜麻登志宇流波斯　又歌曰
伊能知能麻多祁牟比登波多多美許母弊具理能
夜麻能久麻加志賀波袁宇受佐勢曽能古　此
歌者思國也　又歌曰波斯祁夜斯和岐弊能迦多
由。久毛章多知久母　此者片歌也此時御病甚急
尒御歌曰袁登賣能許能辨尒和賀淤岐斯都流
岐能多知曽能多知波夜　歌竟而即崩尒貢上驛
使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵即匍
匐而哭云云

又日本武尊　景行天皇の皇子なり御母は播磨稲日太郎姫の初の名を
小碓命と申しこの名は倭男具那命とも西の方熊曽建の兄人勅ふ殺々しを
以尊童女の姿ふ身を粧ひ其家に入て酒宴し懐より劔を出し刺殺す
者ふ平げ申ふ是より倭建命と称しる其後東の方十二ヶ國の荒夷ふ平げ
御凱陣の道ふて御病あり終ふ伊勢国能煩野ふて崩しる御年二十七歳
天皇大ふ哭し群臣ふ命じて御陵を作りて葬しまつる忽然として白鳥と化し
て倭國ふ飛り群臣其棺を開て見れば空しく屍ふ明衣のみ留る故ふ其所ふ
大和の琴弾原ふ陵を作る白鳥更飛て河内の国古市邑に至りて又其所ふ
陵を営る時の人此二陵を称て白鳥の陵と云ふ要は日本紀ふ見へたり
和泉国大鳥郡大鳥社ふ日本武尊の霊ふ坐す
和泉名所図会に出せり

高屋山瑠璃光院石薬師寺　石薬師駅の西五町
本尊石佛薬師如来　長七尺八寸奉彫法師感得の霊像なり
寺記云　歓面石ふ刻して彫刻に
当寺尊像金輪際より出現の霊石なり　聖武帝の御宇神亀年中創の

泰澄仏所を通ひ給ふに霊光曄々たれば所を尋ねて求め給ふに泰然たる樹林の中より異香薫じ十二神将あらはれ一箇の毒石を捧ぐ泰澄感悟し給ひ未世の衆生利益の為正しく醫王尊の示現なれと速に一字仏創しく霊石仏安置其後弘法大師泰澄の蹟を追ひ霊石をとりて醫王の尊躰を彫刻し相好具満し給へを開眼供養あり其より霊應日々に新なり遠近の致礼稽顙の心仏由嶮峠帝の叡聞に達し精舎僧房営建あらしく寺舞仏寄り給ふ中古寿永兵乱の比蒲冠者範頼上洛の時きくに沿て丹誠を凝し武運を祈て携へ給ひ鞭仏倒れ給ふ地ふるひ給ふ今ふ枝葉栄えう迫くに文正の兵燹に罹く佛閣一時の煙となる幸ふ本尊は兎と兎を燼中ふ恵ふくに沿て〳〵ふる其後の住職圓賢法師ハ智徳の沙門あくある時夢中ふ示現あらて秘法仏教ふ精米を加持し世上ふ與へ病難仏とこひ珠ふ乳汁ふ化婦人出る事驚の心〳〵法師夢覚く教の如く世ふ弘む故仏薬師の八剣米と云ふ柳直盛侯当国神戸居城の時極々の毒特を感じ本堂院内再建あり又寛永六年秋九月十四日夜当国四日市浜田村の長仏の某ふ夢ふ有る十七日夜風雨頻ふ起く駅中の人民死亡とぐさを村崔多く其後夜ふ代り示現あり翌日当寺に詣く夢のよりを語ふ別当同夢を感得せり果して十七日夜暴風驟雨吉ふりて其時竹林乃崔数千羽死落せり人みな驚くとく退悔の他夢仏あらひ霊應其仏世ふ流布せる所之仏驚の奮号仏高冨と云ふ石薬師とこひ山獅仏高冨と云ふ

絶過庄野郵有寺聳高楼西福門前景
東方世界秋百病無自性四大一浮漂　釋元政
刻石薬師其制工癒供方五本當東
拝石藥師其制工癒供方五本當東
露含虚碧瑠璃色問出身途鑒鍵中　澤菴和尚

古仏のおひ〳〵稀れそのおそふ仏ひたやるかみの数へつりれと　仝

御曹子範頼祠　石薬師寺の向ひ民家の裏ふ一社の内ふあり土人云む範頼上洛の時名馬生食の出し所ハ後ふ枝葉栄えり今義経逆慨と倒れさるの小渡ふ枝葉栄えり今義経逆慨といふ田畠の中れあり範頼仏祭るるくん共に祥あるに

日本武尊陵　左堂石某所の右
久宮村にあり
白鳥塚とも

泉州池田之士
幣殿圖

唐東

石藥師寺

四日市まで八里八拾七町　山路六中七町許

伊勢　石薬師

東の立場と鄙の家とうち地名あり

出立て家をひとすぢ鄙の里にまぎれ

光慶日

稚武尊祠

長澤村あり石薬師驛中より左の方へ入る半里許

神明社　渺々たる日本武尊を稚武尊と称し奉る　驛中に道標の石碑建り

年中行事　逸話　紫綾足といふ人日本武尊の御前に

途北　婆理都久婆表須疑氏伊久用加泥都流

文字石碑に鐫く祠おほ速るあれも側に

石碑赤人古蹟

石薬師の東小谷村右の方十三町許ふ山麓村といふ

歌仙赤人の棲所といふ古蹟八里の山上に東面白角許南北

八十角程　四方の双木の老松あり又良の方一字一石の塚あり又里の

儀に赤人の硯水に浮　奥原萬信吾嬬紀行ふ云迄

年中行事　硯水　海　汲　運　毎年武尊の

國分寺趾

石薬師の東の曲郡國分寺村あり今津七宗とある常慶山と号に

往昔　元明帝養老年中に常陸州一の古蹟

海道筋三重郡杖つき村あり　日本武尊東征の凱陣の時足を

杖衝坂

杖つき坂の東五町あり　俗云　日本武尊の御前足を

ようち八名あり又右の方の山上に尊の血塚といふあり饅頭を製しく杖つき村の名あり

古事記云

自當藝野上差少幸行固甚疲衝御杖稍歩故

号其地謂杖衝坂也

采女村

杖つき坂の東五町あり　俗云　日本武尊御前の時三重の郡家より采女出く

日本武尊御前の時　采女の名あり　郡の少領已上の女子

追分泰宮道

泰宮道の別路　太神宮泰宮道の別路

日永村

日永村　太神宮泰宮道の別路　神明山王天満宮の門あり　金丹の茶店あり　尼門跡といへる字あり

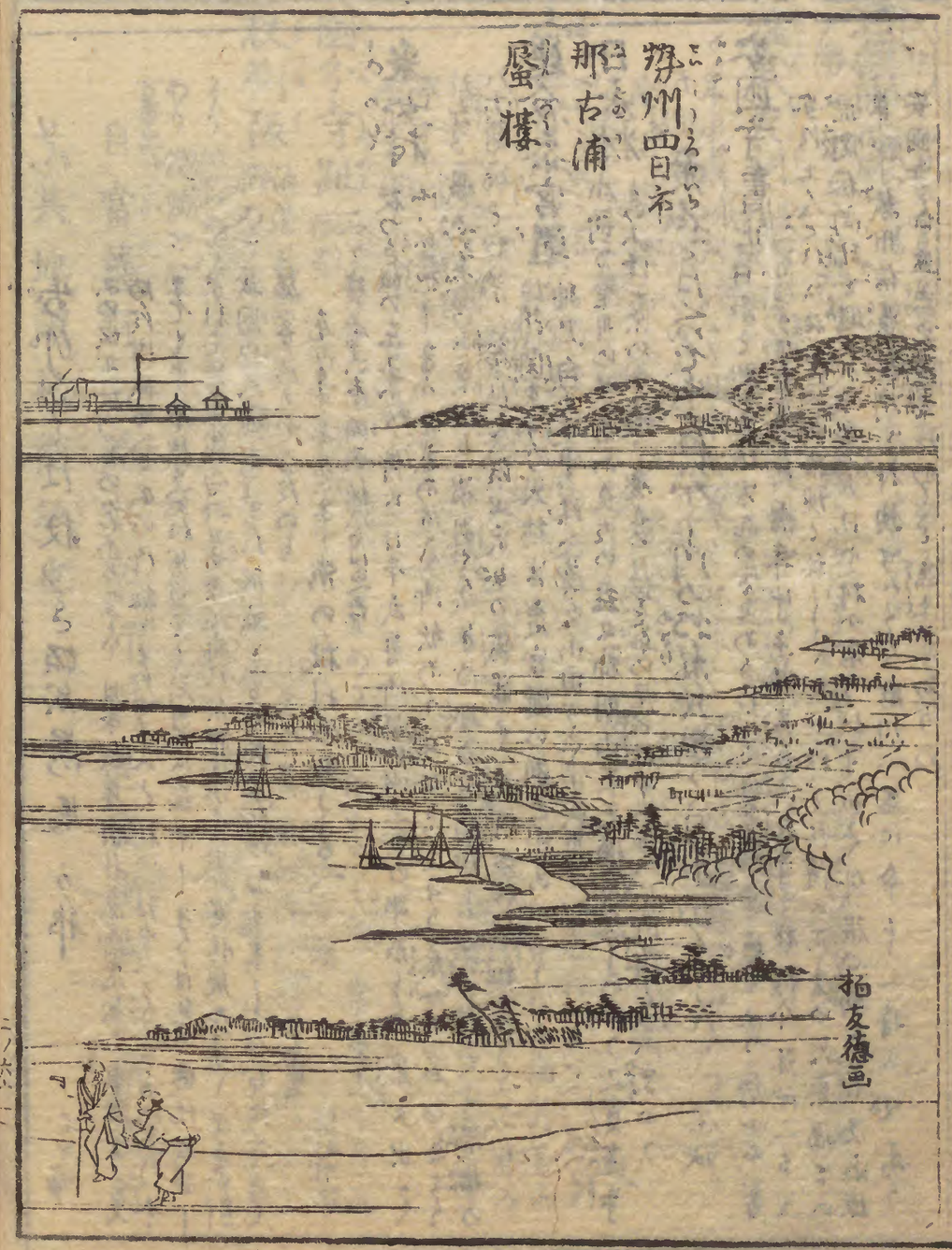
安國寺舊趾

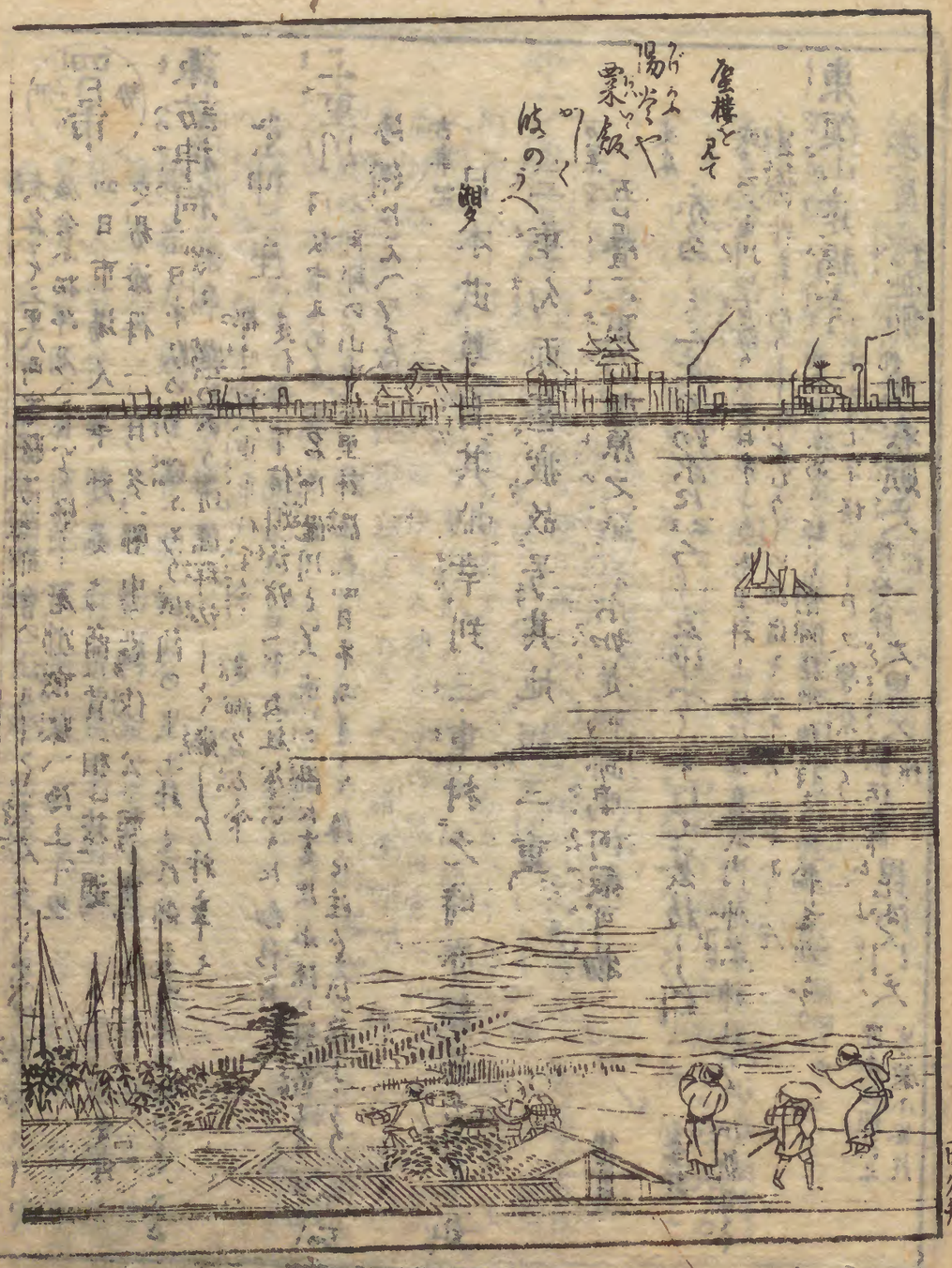
日永と四日市の宮の方あり　日本武尊御前の時三重の郡家より采女出く

安國寺舊趾　日永と四日市の宮の方あり　日本武尊御前の時三重の郡家より采女出く

安國寺　日永と四日市の宮の方あり　日本武尊御前の時三重の郡家より采女出く

安國寺舊趾


常州四日市
那古浦
蜃楼
拓友德画


蜃楼と見て
陽炎や
栗飯
岐のうへ
潮干

宮名なし三里八町尚勝海際都會の地なり　都會の地なり　宿中繁昌なり
旅舍ふ招牌ふくくいと賑し　尾州宮駅へ海上十里
四日市場人参賣の處　商賈相共に遇
交易添得一日多の廛中恐俗公超賣　春齊

伊勢

四日市

諏訪神祠　四日市駅の南の端にあり　樂東　都味齒八重事代主命　建御名方命
建仁年中信州諏訪上下社分あり　勸請
祭神一座　建御名方命
三重川　日駅中にあり　二名所　瀧川と云　或は三瀧に表　水源は冠岳より海に注ぐ　此橋上より那古の海に流れ入る
海岸に見へワ
三重郡の山中七里許流る　四日市

古事記
日本武尊自其地幸到三重村之時亦詔云吾足如三重勾而甚疲故号其地謂三重

万葉
吾疊三重乃河原之磯裏尓如是鴨跡鳴河蝦可物　伊保麻呂

夫木
あまつ乙女の河原に出て玉ゆらを手にとりあげて裏返すらん　李經

或云三重川の古渡は四日市より七里許上流に延喜式内神社あり　此所なり
裏返の神事あり　此所なり　神社あり
東溟山建福寺　四日市ふあり　禪宗　曹洞　紀州總持寺の輪番所なり
末寺七宇塔司一戸　又學寮あり
本尊釋迦佛　他仏　弥勒天　他仏　大黒天　弘法大師作　毘沙門天　運慶の他共に客殿ふ安置

鎮守　猶為向山　庚申　當山會式　涅槃會　月　誕生會　四月　入延命鬼　七月
仏寶　涅槃像　倶兆殿ふ等　出山釋迦　牧溪筆　拈華釈迦　顔輝筆
十六羅漢　十佛像　十三佛像　倶恵心筆
當寺開基は笠堂了源和尚と總持寺二世峩山和尚は五哲の者人形の御傳ふ
笠堂和尚は玄翁和尚の同門ふ　那須野の殺生石ふ　飛ぶ時獅子の
命ありく石工の具と玄翁とよべき　其比庵
ふりく笠堂　鉦ふべき　若笠堂系れかば
今に笠堂とも云ふ

那古海廛樓　昔は海　那古浦　那古海　名呉浦　名呉
浦あるべし　日本格の南九所目　紀州　那古浦　名呉明　名呉
又紀中　那古浦　那古海　名呉浦　名呉　名呉浦は宮村　紀むら　梅　名呉
廛樓　海上五　川　藤　蓋　云　伊勢　太神宮　尾の熱田宮　神　あるとも
其形　風樂　川　藤　蓋　浦　人　時々　又は　樓　蓋
宮殿の相　鮮に見へく　漁　尾州　海　浦　ふ　ど　見　本　ゆ　又　國
とある　又　尾州　海　浦　ふ　ど　見　本　ゆ　又　國
あるもあり　拾ふ　潮　水の　氣陽　獨ふ　素　昇る　陽炎
の　あるん

那古浦廛樓記

那古浦廛樓記

静者天地之氣也　質者姑不論焉　夫一氣之運動轉旋也　會氣者皆與焉　神仙有逍遥者　有頭見者　有隱匿者　彼此萬熊皆一氣哉　吾鄉四日市驛之爲地也　在勢灣北畔而遠望東南數十里

面干大洋海門矣是海門也南界勢之熊岳北則尾州海嶠也其間亦數十里有鰲洲及小洲數處點如盆池設石然吾郷所望不能挹取其微而已春夏之交數月中日晴賓和氣雲静風收將雨之前自熊岳至尾之嶠忽爾炯霽失海門所在而地如連接霽上有物如雲烟變態或臺閣或門闕前有千旌後有鼉路行伍排列森森奇觀不可說也須臾湮滅而移轉而山海景象復平常兵其顯見也發南而移轉而失北古今不違歳率五七回若二三回或不見土人傳道吾郷畔數千歩盖所以為吾郷名勝也悉不過二所皇太神廟遊幸干尾之熟田神廟也博物者云勢灣之北畔産蜃也尚矣盖以為其所吐也鳴呼神靈之遊幸也蜃之吐一氣也天理不可窮神慮不可測若夫天地間之運動轉旋為奇觀為名勝者非邪秋里生將著東海道中名所圖會求貞所記圖寫是奇勝且題事實以贈亦貞之拙筆端之一氣哉

寛政七乙卯夏五月

勢州四日市驛廳馬曹西村貞節

垂坂観音

四日市駅を里許垂坂と云ふ天台宗本尊なり観世音菩薩の慈覚大師作なり安慶寺の開基なり慈覚の弟子に慈覚大師作なり安慶寺の開基なり慈覚の弟子に

徒貴て添和尚本願なり舟本云郡の廟躬廻むり諸堂巍々たり天正

の兵燹に荒蕪次

志氏神社

朝明郡羽津村ふるう延喜式内

系神天照太神荒霊なり祀る

丹比真人

おそれしふ人と思ひ志氏の清水綿とりあてて垂れし思ふ

西行菴蹟

今問跡さだかなるべし

山家

栄の尾

栄の尾不よるく梅の匂ひさそふ春を告しるか

名物煽輪

東福田村の西の茶店に火鉢と彩燭一ツ松毬多く輪を結ぶ

蔵谷氏翠陰に栄名の焙烙

町屋川

尾州小牧合戦和睦の後内大臣織田信雄と豊臣秀吉と此河を

宮まで海上七里に入海勢州尾州の国境なり佐屋宮まで九里栄名郡

栄名

伊勢

小栄名あるべし栄名あるべし栄名あるべし栄名と専称す

愛名郡に宰治あり愛宕郡に

年中已後の本つくり繁花の驕

勢尾都會の繁栄多く賢人の名称を

栄名城むかし三滝城と云天正年中滝川左近将監益北勢長島

左城しく栄名城と云其後天聖周防守景後服部采女正一正

一柳右近将監直盛氏家内脇正貞和等次第に領し一関ヶ原合戦の

後本多侯松平侯次第小

左城あり

名産白魚

漢村赤須賀より出く時雨輪秋の比美味なり

名産白うを白魚

時雨輪秋の比名産の名あり海豆腐なり

四日市茶名の
ちいさ富田あぶけ
の鶯捨八石わり
しそひらてのくも
あゝふ憩さく酒と
勧めこれを賞翫を

ふるさや
ゆた鮓の
ふゆる
春
駐屏

四日市ふ迫来
ぜ茶して名の
妓婦わうろろ
ぬ人優みしく
糸の春めて
和おな猫ば

寄筆意

あくへ
ろしさ
ゆの春も
えば
ひくゆふ
蔦ろ
茶ふさろか

ふれと名産の白魚
恰ふもあくひくん
うし

春泉齊画

白魚の
網小
あの
あの泡
東作

栄名の海苔
名高き雲小豆
まで白魚
半ばハ又鮑
秋八月の初より
時なる比と
美味しきハ
鮑の名所より
出たり
栢友德画

矢田八幡宮　素名矢田町にあり慶長年中本多忠勝侯西の山より此村へ移す例祭九月十九日又六月祠社地にあり

天武天皇社　同驛鴻巣町にあり　天皇御巡幸の事八日本紀に見へり旧地なる本郡なる村にあり古跡に菊の井といふ名泉あり天皇の御供水と

いふ天和年中此地に遷す

例祭六月十六日

一本松　本郡なる村の西田圃の中にあり東西三十間許南北九間許昔代の大樹に

四方表へ本法の山神祠あり俗に浄土宗本郡なるの旧跡と

一本此松下あるべき寺の曙　魯縞

長圓寺　同驛同町にあり浄土真宗西派初は真言宗旧地は城下の南江陽村の

小郷にあり慶長六年今の地に移る　此石詳中古住職貴道本願寺蓮如上人に帰依し

と成明應五年二月九日寶如上人より方便法身の

尊像を免せられ宗二世圓道に俗姓

織田の家臣佐藤左馬頭義治とす

寿量寺　同驛同町にあり日蓮宗身延山の末寺開基日意上人文明年中建立京師

妙法寺の開基と同し什宝に日蓮上人の大曼陀羅あり其外数品あり

願證寺　同驛同町にあり古田派初は本願寺門徒なり開基は蓮如上人の嗣蓮淳

上人と正徳年中西派に改る古田門徒とあり

本尊阿弥陀佛　安置弥陀永禄元亀の比長浜より移す迎年

宝暦年中本堂を一身田に移し一對面所とせり

十念寺　同驛西側にあり浄土宗鎮西派　佛光山と号す

額十念寺　佐々木玄龍筆　額佛光山七歳女子書に

本尊合阿弥陀佛　立像長三尺観音二大士俱に安置弥陀脇侍に地蔵菩

光明大師若は上人開基響阿上人像に安置

法然上人御影　常寺才一蓮宗　正月廿日向扉　良忠上人傳法之命　其外畧之

支當寺初は當國朝明郡田光村にあり本願寺創　嘉禄元年に

良忠上人三重郡四足八身村に移す　寺領と弘安年中響阿

弥陀佛山なる住職に念佛六方遍歩日々怠なく浄土宗とす

師の良忠上人東国へ弘通の時響阿弥余波とおしみ品の再会を

約し且八今より毎年寅の年に東に向ひ来たるべし毎日寅の刻に東方に向ひ合掌し十念

称名し約し向光明を朝をそれより毎日寅の刻に一声毎日に入々り故に佛光山十念寺と

弥し九品の再会に朝をそれより九品院とかづけり其後文明年中

今の地に移転せり

光德寺　同驛新町にあり浄土宗鎮西派　額光德寺

募頂大僧正順真筆

本尊阿弥陀佛　恵心僧都作長四尺余上品上生相むり法然上人遠州櫻ヶ池

念佛弘通の時天文二年浜名郡紀伊阿闍梨に則ち此地に立寄

地に隠棲し尚寺内中興せり

泡洲崎八幡宮　光德寺門内にあり素名の旧名三州崎と云北に自凝洲

中に加良洲南に泡洲と云ふ今光德寺の鎮守と

遥に已前の南海道と相殿天照太神

春日明神例祭八月十九日

素名神社　同驛宮通の小にあり延喜式に素名神社二座例祭七月七日

石取神事として又七月十七日ヨウリノ神支八月十八日大祭禮

祭神　二崎明神　神祇　天山祇神　天巳貴命

春日明神　攝社　大山祇神　本宅同郡光命　母山洞　素神　天巳貴命

地主神とす

末社 神明 紙屋 若宮八幡 多度 酒解神 神宮寺 切基の系創
荒神 白山 稲荷 住吉 仲眼院と号ス
当社ハ彼母山地主神ニシテ日吉山王大宮神社ニ延喜式内 菜名神社ニ当ル
あるゝ先ハ三崎明神ハ八日吉山王ニ名其後 伏見院帝宇正應二年南都より
長日明神と菜名益田左衆都村ハ移シ同帝永仁二年八月十八日益田ニ
ハ加良郷の内ハ母山の社地ハ移
播龍庵 菜名城西の角ニ二ツ月の櫓濠ハ向ひ棟瓦あり古代の作ニ
流云ハ下ハ奥羽殿ニ本ハ
本統寺 菜名寺町ハあり京師東本願寺末 菜名御坊と称ス初ハ
教如上人の息女長姫君法体シ秀量院殿と号ス門徒僧
住職ハ寺中二ケ寺末派
弐百余寺 尾濃勢ハ敬至ス
輪崇寺 日所ハあり高田派 初ハ仏心宗ニ同基ハ真海と号ス二世
圓城房 親鸞聖人と師ス 唯仏房と改ス
本尊阿弥陀佛 親鸞聖人影 自作 六十三才像 光明本 一幅 聖人の真筆
文殊像 ※ハ歩 後寛 伝都の寺五王九の持ル在王尚ハ小 弥勒像 初ハ自疑作
当寺成船着所と称ス 親鸞聖人六十三才の時東関より帰洛の時
尚集ハ着船ある邪尚寺ハ入ル 師逗留の初聖人の寄係ハ光明本
深草ハ遺一ハ旧地ハ今の
延井山の近隣西の山ハ
神寶山法皇院大福田寺 菜名城下十町許西ハ東方村ハあり
真言宗仁和寺門室の門法流ハ
本尊阿弥陀佛 安阿弥の作生涯の霊仏ニ軀の其一負ル
毎月十五日開扉 近隣郡系次

正観寺 右脇檀ハ安次長弐尺二寸五分 鎌倉文會 稔嘗 勲の両作 縁起云
寛平法皇持念の本尊当山ハ寄の付所寄附ル
寛平法皇宸影 左脇檀ハ安次其外
堂内ハ釈仏多シ
聖天堂 本堂の西ハあり聖院宮報恩院法下持念の尊ハ係ル霊験新ニ
十一面観音 ハ基ハ作 鎮守 天照太神ハ系ハ
門前の山腹ハ鎮坐

付寶

○八相成道画図 聖徳太子所尊ある一の什宝ハ相伝ハ海内の寄寶ト
○十六善神繪 聖武帝所寄附皇太神宮法樂般若會本尊ある
○如意輪観音曼荼羅 淳和帝所寄附 同帝所寄附
○金剛界大日像 淳和帝所寄附 ○八佛曼陀羅 村上帝所寄附
○金剛子念珠 寛平法皇所持 ○文殊菩薩繪 後宇多帝ハ寄附
○不動尊 弘法大師作 同尊 智證大師作 ○寺領綸旨 ○不動尊繪 奥敬大師筆
○紺紙金泥 龍施女絵 光明皇后所筆 ○多聞天 弘法大師作
○二菩薩法号 法陽成院宸筆 ○尚寺縁起 西三条内大臣實俊公筆
其外数品累之

当寺 開明天皇所寄 聖徳王の系創ハ其後 天武帝 持統帝等
の寄あり般若會仁王會あり 聖武帝ハ皇太神宮奉幣の付当寺ハ
幸 幸あり千僧法樂會ハ執行ハ弘法大師ハ一度安居ハ密の法ハ
修 修ハ真言の道場ハ 淳和帝の所時ハ勅願真言の梵刹ハ

寛平法皇（宇多天皇）皇太神宮（法樂）と為て當寺に幸あり皇太神宮の
新向に作侍ひし日を累ひ日に後さきに游觀し給ひ因茲方丈と山宮とを
法皇院と號を後冷泉帝も永承七年正月幸有て一万僧に齋を勅會の
續經あり其後弘安元年天災に罹く伽藍炎燼し中興伊勢長官額田部
大和守實澄神託に蒙り忍性上人（興正菩薩の上足なり）と心を合せ再建ふ及び
福田寺と號し忍性を中興とす（神託の霊應叡聞に達し）後宇多帝の
勅願寺勝の祈願に賜ふ足利將軍尊氏尚ふ尊信し給ふ文の字を与へ給
大福田寺と称を世人呼て大寺と號ず厥后明應年中に至り敕ナ度の兵燹に
罹て往古の南伊勢山田に移り神宮寺たり唯一ありし時奈名郡に移り
近世万治三年また安和村江場村の間に移り今東海道に福村と云へり是當寺
の門前なり所以故に門村と云へり北伊勢に於て勅願の霊場眞言の古刹に
於て双びなし（特統天皇の御宇の時の付之梅の神寶なり）姑く納置し所と
御寶殿（宝殿町に有り）天武天皇第の付之梅の神寶なり

佐乃富神社（所宝殿社地に有り）延喜式内
中臣神社（日所に有り）延喜式内
佛眼院（奈名奥庵に有り）天台宗 東叡山小属に山号寶興山
額縁に書く寶興山と書く玄龍の筆
本尊文殊菩薩（當山二十世快尊法師の作霊佛阿弥陀安万絲の作
又十一面観音 三宝荒神共に快尊の作
什寶
○紙銀泥華厳経行願品 恵果阿闍梨筆の延暦寺縁起 尊氏親王筆
○涅槃像 唐筆 釋迦涅槃の図色彩鮮明 比叡の妙画
已上
當寺の開基は伝教大師 延喜帝の御願 快尊法師は長寿 の住職 東名入江町に有り 法華宗 西山派 仁明帝御宇吉運和尚開基 其後勢州多明郡馬場に移る
大圓寺
本尊阿弥陀佛 恵心僧都作 脇檀阿弥陀 立像 初め天台宗の本尊 お婆と称す 鎮守 社 八幡
什寶
○十王画像 顔輝筆 丹青山水 大黒天 伝教大師作 授頭巾と称す異相
地蔵尊 本宗古画 ○不動尊 十六羅漢 本名色町に有り 已上
當寺は慶長年中 本名色町に有り 今は一色町と云へり 武士屋敷と称す

柳堂法盛寺　案名萱町ふあり　浄土真宗西派寺中ニケ寺
末寺六十餘箇寺北伊勢ふあり

本尊阿弥陀佛　法慶作長三八餘　開基ふらの安徳帝ふらく　奥州秀衡の持尊ふ

経蔵　延喜寛政二年造立額　般若山天成寺　僧尼東福寺ふ　南北十一町　東福寺の尼と草庵ふり　拔ふ東福寺ハ開山聖一國師ふり　火難の焼ふし
住職ふらくた　僧ふらくん先

金敷堂　敷楼　堂ふあり　書院　額柳堂
当寺ハ原来名宗ふらく　三州額田郡矢作ふあり　嘉禄元年の秋親鸞聖人
所承洛の時ふ浄願ふらく　柳堂と称ス　聖人の所生ふ　忠圓房任職
秀衡の支族文和七年十月十七日寂ス　六世　賜人　今ふ存ス　忠圓房ハ奥州伊達
案名郡　俳田左三衛に移て柳堂　阿弥陀寺と号ス　十世　権大僧都
祐珍法盛寺と改め　大坂石山本願寺　聞乱の時　敬如上人　軍勢
催促ふあり　十三世得全院寂然　本願寺　准如上人の孫ふらく　あんらう
代々准逝ふり　当時寺職ふらく　十六世ふそ　ふ

最勝寺　ハ所ふあり　右同宗西派　当ふ原　真言宗ふ
本願ふ寺ふ世貴如上人ふ　ふ

本尊阿弥陀佛　長日の作　初ハ同国長橋坂村ふあり　西勝寺と　辨
ふる百八十餘ふ　門徒五千餘家ふあり　長橋一乱の時尾州
辰田ふ移ス　其後　案名ふ　轉化享保年中　西本願寺院家ふ進ス　当時
寺職ふらく　北一世ふ　ふ

不動院　ハ所ふあり　真言　修験道醍醐三宝院ふ属ス　旧名天林寺ふ
元和中城主松平信州　庚申行　所ふあり

本尊不動尊　慈心の作　金剛界大日尊　三国作来

鎮守天満宮　不動院境内ふあり　香居額天満天神　佐々木志陳広綱　神像ハ長
ふ天餘白木作り　又天満神画像　近衛信基公の筆ふあれハ　天正
のうしろふ親鸞神影像　写ふ　其上ふ作　海ふ書ふ　菅廟一同所に
奉納ふ　ハ其一幅ふあり
ハ駅　刹　変ふあり　曹洞宗　旧地ハ城西　楊塚ふ　ふ所　持統天皇　潜龍ふ
地ふ　ふ旧跡ふ名木の柳ふ　ふ　ふ

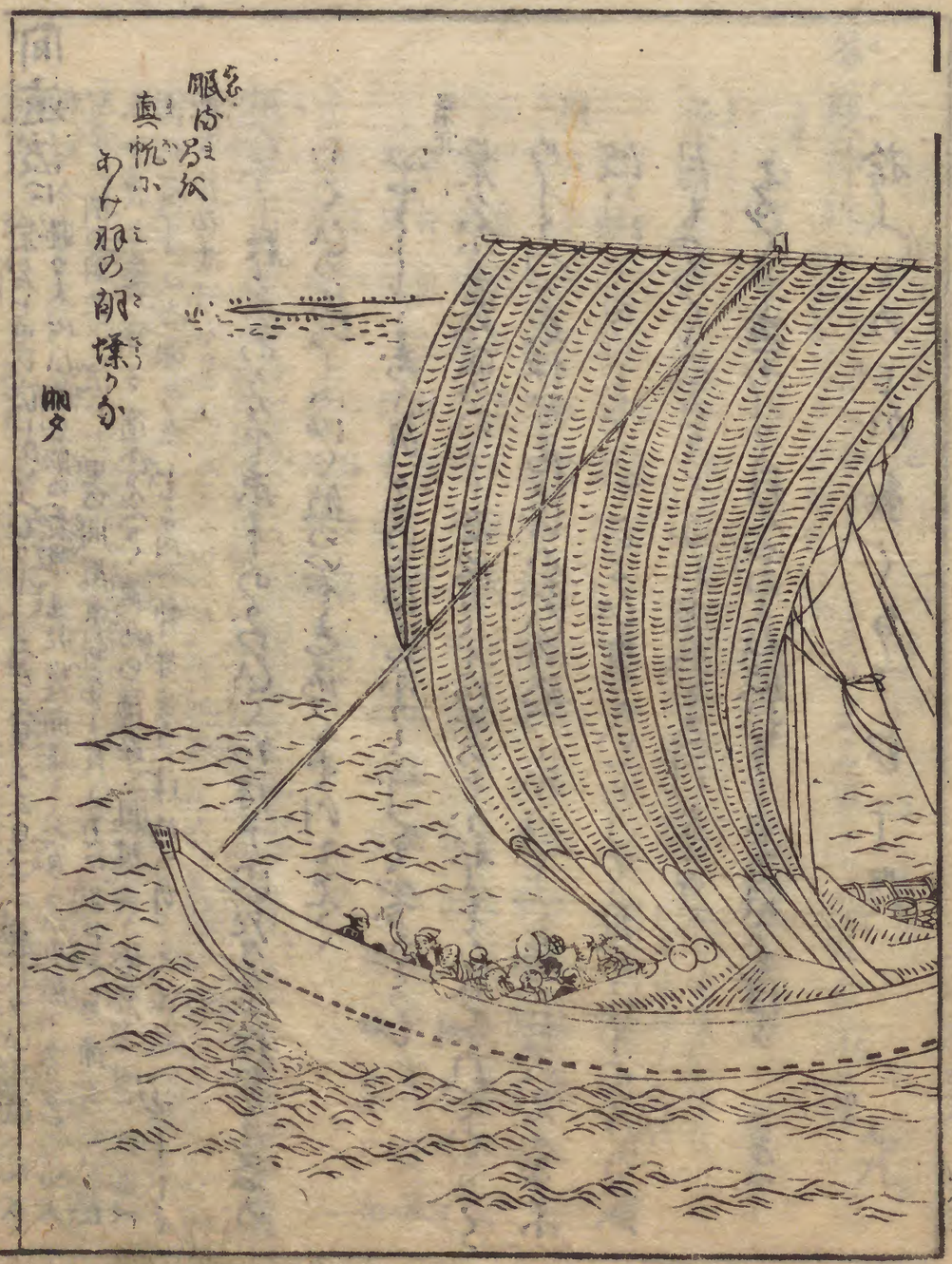
楊柳寺

本尊釋迦　坐像　正観音　金銅坐像　天竺作来
瑞祥勝の号解ふ

赤須賀地蔵尊　赤須賀東堤の上ふあり　石像三尺五寸　海ふ出現　真言　修験道ふ
類龍山　佐々木志摩　大聖地蔵王　願　徳海禅師
常燈明　快定　波海巡船の極ふ　白魚塚　芭蕉翁句碑ふ
寶暦年中　西南の陰海ふ　句ふあれ　ふ

伊勢海　京名ふ

古今
いせの海ふ釣をするあまのうけやなれやみを定ふ　俊成
法橋
いせの海に塩焼くあまの袖ふれなれぬ君ふか　紀伊
後古
いせ海のあまとなれりハ　ハ　ふ　ふ　ふ


眼内号公
真帆ふ
あみ服の朗煙うか
卯夕

葉名波口
一名
間遠
つくつくと
春泉斎画

間遠波に　桑名七里の波に　天武天皇大友皇子に襲れ給ひ尾濃へ乱れ
避り給ひ付山波に船の着岸を
尾二州の国境へ波に七里の間風系斜ふ
東海道遠の浦々通小船へ
船にのりも可

むらさきのひとこゑのうらひくなかぶかふいなるふ伊勢尾張の
あまをとめの海つらふゆく波のいとをもたゆたへ
しらくもの雲こゆるあまひとたふうつくしもあるかな
暗記　桑名の貴人城のわらべ度ならくるなをのをかをしてやうく
うつうつ思伊勢尾張のあらひの海つらかのくと霞る月のえんなふ
波は付こ白く立くもこのよひ舞もいのめ〳〵舟をこゝてうこゝ
月もあらく入方をくもれもとの人を志川先生
るくやをふるく社人やわらぬ波むらのいせはをばら　光長卿
拾人ものこれ初くなり　次　千浮
かゝみ代

檜板子手賜ふ間遠のつゝうか　班竹

多度神社

北伊勢桑名郡多度忌ふあり　桑名城より里乾小番ゝ
延喜式云多度神社名神大
万葉　多度川の瀧と清らむ〳〵ゝ宮はるゝ多度の瀧　人麻呂詩
祭神天津彦根命　多度大神と称ス
相殿　左面足尊　新宮明神と称ス
右惶根尊　門明神と称ス

日本紀曰素盞嗚尊御子天津彦根命此英城國
造額田部連遠祖也
續日本紀云延暦元年十月朔叙多度神従五位
下云自其仁明嘉祥年間次第昇進畏之
三代實録云遣正五位下右中弁大枝朝臣音人
向伊勢国多度神社尾張国熱田大縣等神社
奉神位記財寶同録云貞観五年六月進伊
勢國従二位多度神加正二位同録云仁和
三年四月六日乗名那
多度神社遣使奉幣

攝社一目連祠

社前の側ふ紀ふ一目連命ハ荒祭伊勢両国
忘部祖也姓氏録云天津比古祢命ハ天麻比止都祢命
社前云北伊勢洪水暴風の災あり付ハ出現ふ
神霊の應験今古ふ変化ふ雷電次故に北伊勢に洪水流の
多度神社ハ一目連命ハ天目一箇命ハ荒祭伊勢両国
根命と称ス則親神ハ
祢社ふ成ふと云人可否

末社 伊津久志祠 八幡宮 一巻祠 藤波祠 八王子祠 両宮 鉾立祠 山神 五座 稲荷祠 龍神祠

支当社の鎮坐の年歴久遠なり〻く分る事社伝に昔八多度神井小山猪銅村尾津村等の邑里みな神領なりく人ゝ崇敬する当社を鎮神とし五月の祭式ふるはしく勢ひ故小山村民流行疫病或八産婦の難かしく分て永禄年中丸八織田家の命を蒙り瀧川一益を将軍として長島多度の合戦止事なし山村多度神社冠ゝ耀く神寶奮記 慶長六年の比本多忠勝侯采名を城の内当社を再営し其より累代の城主尊崇ありて人畏奮観小祠なり年中の例祭七度中ハ五月端午ハ流鏑馬あり神領の村民神輿小旅所に集ひ騎人四拾人ゝ奉仕日神輿を基小山村の東御旅所へ神幸あり帰路流鏑馬あり近国近郷の老若袖を連ねく形美稲麻に異なり同月初酉日ハ田植の神事痛除月初日ハ皆形餅を神供し次神主小井氏平野氏の二家社僧法華宗とし真言宗ハ禁ゝ大悪の儀を本とし上愛宕ハ坂路千仞所

ゆゑ所見地蔵弥勒堂観音堂に倶ゝ禁ゝ修験を喜宝院とし社頭ゝ彩殿幣殿御輿舎ゝ水所みな三の滝川を用ひ金鼓ゝ二完堅如法あり

抑南勢史 内外の神山野ゝ多度の谷しゝ実ゝ神国の中心神国たるべし

多度川 水源壺渓の下流岩ヵ淵ゝ出 又源出 偏ゝ流れ来 多のゆゑ 俗説多ゝ山半と記しく 不思議ゝ書り土人云り流れ地中ゝ入る 神水其地の様ゝ避さしめ人ゝ入ゝ 幣供の時

多度川の清きゝ流れ千年ゝ絶ず 或ヵ云多度神ゝ美濃国の郡名ゝ 多度ゝ美濃国ゝ書老の説も多度の山続きの奥なりしと

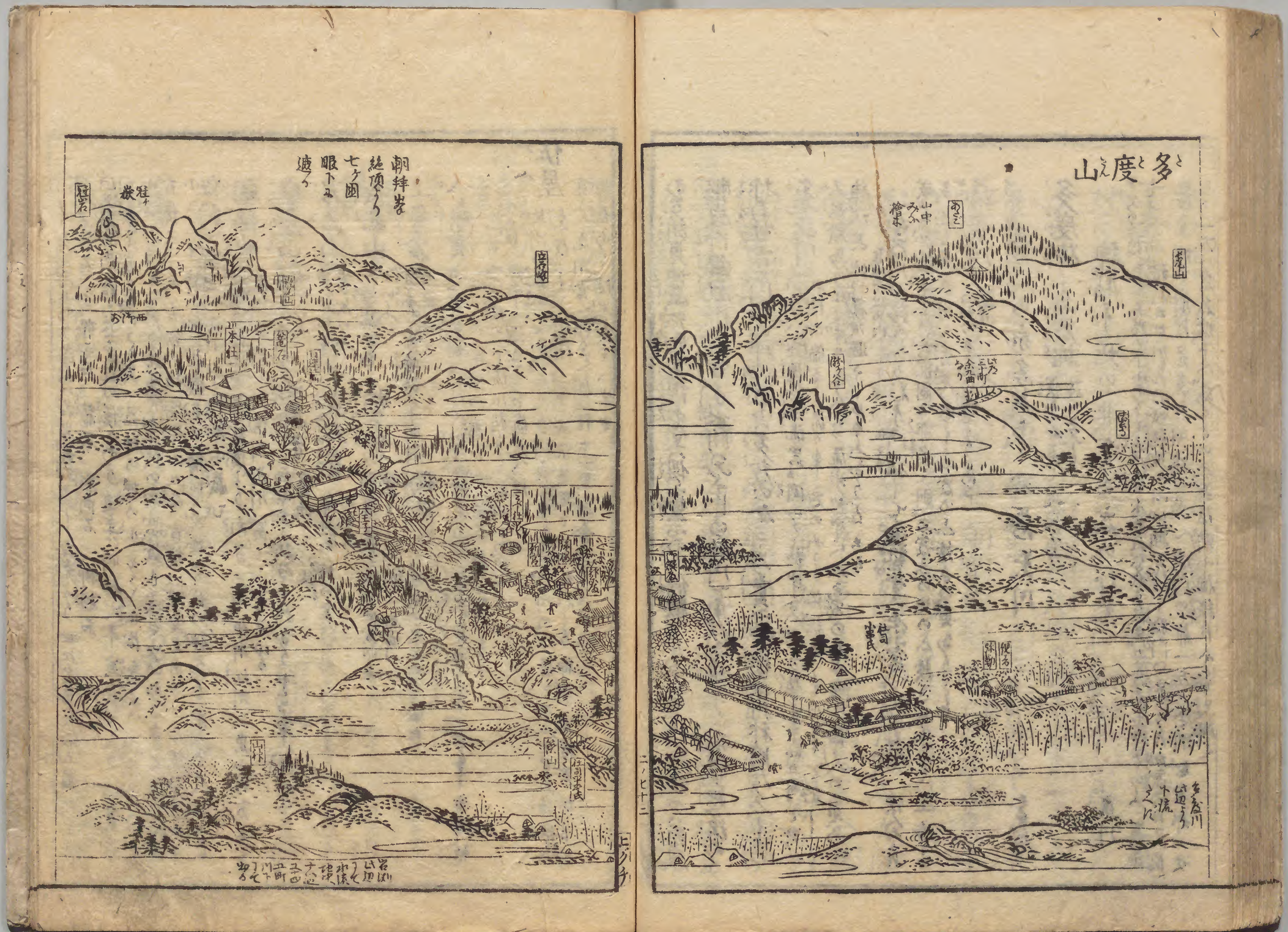
落葉川 多度本社の傍より落る 龍川とし

多日記 宮人の家名ゝ多ゝ落葉川

多度梅 多度桃 倶ゝ名産ゝ 梅ハ多し 桃ハ今ゝ

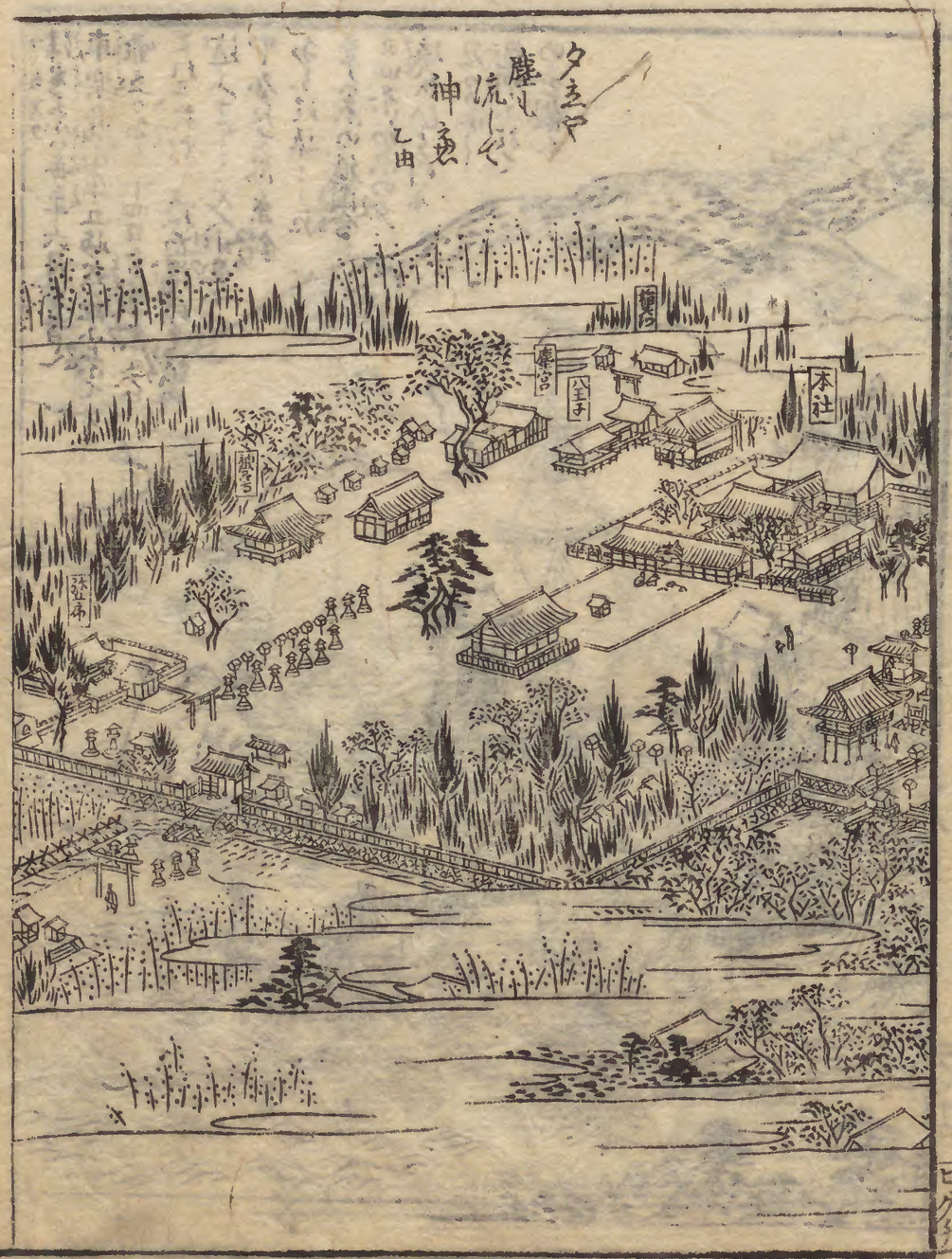
神風子 北の要や 多度のむ光 彦川

七色楠 本社石階の下ゝ有り七色の木 周五丈八尺 幹環 龍流云 別長治城修理の時ゝ楠を伐く 城門の扉とし 功成の日大風発り城と崩れ是多度明神の祟ゝ城門の扉一方ハ尾州 紀州郡ゝ吹 去り一方ハ桑名城下ゝ落るとし 其後新ゝ植繕ゝ今も大樹ゝ


朝拜峯
絶頂より
七ケ國
眼下に
遠く
西門
本社
多度山
山中
みち
檜木
陸奥谷
宮

五石　後山小野の西山にあり岩あおぎ　古来より世に名ある石立斛あり
冠石　烏帽子石　龍石　影向石　御櫃石
山五箇の内龍石の社の後小あり辺年　明和七年庚寅七月十八日　龍石
自然し崩れ落る　駅一弓許の程いなり　止ぬ　度々の岩石僅の来
古鏡二十面　古剣一振　陶器　寺代の不思議と人々いひあへり其石の下より
小こ二つ　背小州　花　獣　鳥の鑄形　古銭　文字石　壹文出る　古鏡は大五六寸
宮家へ言上ふ及び今神殿に蔵む　至極古代の体なり則領えへ就又は
朝拝峠　社頭の後にあり　絶頂より南方志州伊州江州又東小の方みる
甕尾山　濃州尾州三州信州駿州富士山等見ゆる
峠とあり　本社のあれ　西御社　甕岳峠中絶壁の所なり生る事怪し
岩石山　本社の東北　立石岩　本社の坤の方
岩なし山　岩なし山
長尾山　上愛宕の西　鷲倉　別当法主の地なり
上愛宕石　鷲倉より嶮路三十町許　獨鈷水　一巻洞の茶ふあり俗に
諸国眼下ふあり　坂下　八町
八壺溪　両岸絶壁　龍水中流　弘法加持水とあり
其傍の岩石苑蔵　岩石苑蔵　生る事百町餘
八壺溪の下流に所々流れ　忍州多し
山石渕　地中へ伏迄ト流れ入
佐屋　尾州の東門　佐屋川の下流を渡る七里の海船
佐屋尾州宮へ出る　佐屋廻り　神宮万場岩源岩
長尾州宮へ出る　佐屋迄ト一里　旅舎
ほ岩天王へ半里

紀り　くり合月は海をいとひて今彩漕るあり　佐屋社の舟　名村に
ふ結　伺と人の父なや　佐屋泊　ちなし
ほ岩渡　尾州門真庄ほ岩渡八丈所抄三出　古歌多し
伊勢人のひらあやしくうりほ浦のうり甲斐川かけそ家の来　名所
主水
くるの日いろ程人と船人はほ浦のつうり風も吉　伊勢皇子
秋萩覚　津浦より梅さ一ふれ名江ある甲斐川さく名世乃原　西行法師
貞應の道記
七日市場と云く　ほ浦の渡と云所に舟あり　下り
ほかりぬ駒も立ぬれば菅の浮葉小浪のうれども紅面性ハさりぐ葉も
とり出る梅の実紅ふ　ふれて
さ一ふれ梅の実紅ふ　ふれて
渡りもとおりの国ふうほり名片岡ふ新湯の新ちさ一く焼世の葉
結伺あり小笹の来ふ駒ゆ　ふ　ふ　ふ


夕立や
麓に流しや
神輿
乙由
本社
八王子
摂宮
摂宮
摂宮
大鳥居

津島
牛頭天王

東岸の海に年六月十四日
車楽舟山車立時分船小京て
鉾立ての十四日者宮本八幡
これは桃灯と数石掲げて城の
這てふすくしも見へ水面ハ
四方にて風系鉾
みなこれ旅ーしれ
来ハ系の祇園会
は四条河原の夕
涼成ひとり河は
見へる水ー
尾州かたの
の者観へ

津嶋牛頭天王（祇園神社ふるい社の生土神なり）
例祭六月十二日
祭神素盞嗚尊　本社は南向神殿ふるい絵殿廻廊本殿勅使殿中殿
遷座南之門　門脇ふる　門外皇太神宮　鎮座
一王子祠　本社の左ふるい東社橋田殿　八王子祠　本社の右ふるい東神五男三女
柏宮　遷座の左ふるい　居森祠　第一別宮と称ず　弥五郎殿　地主神と称ず社説云
第二別宮と称ず　尊社の荒魂なり　疫宮と称ず　種絶命なり
牠毒神祠　尊社の荒魂なり　摂社と称ず　横民將来祠　第二摂社と称ず　十二末社　天王の裔孫
熱田神　登神　弁財天等なり
主嶋社の神傳と鑑ふる世の舊名は藤波里と云人皇七代　孝霊天皇
四十五年牛頭天皇の和魂大神韓土より飯朝浦に　西州對馬に
立く業と果ゆ厥后　欽明天皇元年神勅有て尾張國海部郡の海東海西
門真庄に神宮ふる神宮ゆ按ふる對馬州ふる年業久しく鎮座ゆ
ゆえに遷座の後も宮を改て津島天王と称ず　地名も藤波と
変じて津嶋波と称ず後世永禄天正の比贈正二位右大臣織田上総介平
信長公尚武を愛向しく畿内及び東海東山両道の間ふる武ふる

二ノ七十七一

逆ある武討く威と四海ふる輝を東海旭の出るが如し嶋社天王の神威武
尊信し治平安民の擁護武備ふる社頭武徳堂ふる
ゆえに是れと津嶋東と云て遠近の壮観とする所ふる是四海の浪穏た
しく平天下の瑞あるべし

津嶋紀記

花洛　岡田子葛蹊述

いにしへ寛政の初つかの月尾張の國海の里小村氏のまひとふるて
津嶋の神ふるを見ふる姫田氏とあるしと考ふる小村氏の神人眞智時綱
が著せる紀正徳年中の下りしとも示されしふる此は朱由議論と王ふるしく行狂ふ
おんてふりてくふ大あとあれ今は海さしくふる所と拳くあとのゆくらいさてう
ゆの記ふりて要と津と考ふる拝武東ふる神人民の安穏ふる所ふる
情と納涼と教ゆふる基ふれば十七日の宵祭とりてひとふる　故に
試楽と云ふる信楽と唱ふべしと神宣記ふるくかの記ふるゆ
より八日ふる迄び毎所の車座ふるしく調楽し十七日ふる至て江口ふる於て昨の試楽し児
ども祢者ふる詣ぐ十七日十九日共ふる安全の祈とふる里俗ふる也しとて

まづ賀茂の祭に車楽五輌（記に倭建命の御陵下の御葬の時に、御陵の下に御葬の五輌より出でたりとあり）おのゝ船二艘ゝ
あるべしゝひあるべきに拭ひは為川ふ法ゝ郡ゝうゝ毎ゝ笠鉾とゝのゝ形ふ
挑燈と掲る事おびゝゝ記ふ二百六十ゝゝ一と為の月数ふ象の真柱（伊勢の意と
ふ掛るに十二ゝゝ月の数る欄の四方ふてゝに二十ゝゝ一月の日数と
ゝと今海ふ見る形ひ数ふ記ゝもゝ海をゝんとゝおぼゆゝくもゝゝもの
拍子ゝとゝゝゝゝ笛ハ海ゝくゝゝゝゝ笛の名ゝる生ゝゝゝゝゝゝ
太鼓のかけゝゝ也於ふと唱ゝ市飯村の車楽ハ也平波と唱ゝゝゝ
市飯ハ今飯ハ赤ゝふ其所ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ五輌の車楽ゝゝゝゝふ
漕出ゝゝふゝゝゝゝゝゝゝふ池水ゝゝ毎ゝ月数ゝ月数ゝゝゝ光ふ
葉ゝ又ゝひゝゝ見りのゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
名ごりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]れ給ふのをみぐうなつて[illegible]たうへおそひをゝまれ小奉も見ゆ
やがてお食みーく樂と奏し神立し歌舞の杯禮畢てのち志社ところ
ぐるまーにうつさこ船に乘しーりそはに入れたの素は付く

出國形くさう紅と牛一用作おとみの國ふもとなどと記す要し
按ふ車樂とだんしとと唱るいたれ[illegible]波合の記と[illegible]終子
敦賀の孫王は[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]の[illegible]付に車樂大間ちと
いつの是ふ故し[illegible]の神人はうく船に乘し大間ちかおぐさ
むたーに守さ[illegible]船と[illegible]くみる付あ[illegible]うで免[illegible]係しごとく
えかさみく是[illegible]誌くさ[illegible]
ーくるが[illegible]ものとく其孫王の[illegible]
やふみえーはくれあるく[illegible]
の記ふも大橋家藩といつの[illegible]
[illegible]合の記ハ井谷の記櫻去記かどいつの[illegible]
[illegible]の別港の名[illegible]く車樂の私語等[illegible]故事[illegible]
[illegible]るハ遺恨あり今世治[illegible]の夏形を飛り車のて曳と
ぐんじとしてもの山前の[illegible]
[illegible]記とつ[illegible]の[illegible]
とせ[illegible]記[illegible]の[illegible]
[illegible]とつ[illegible]
[illegible]

とハゝども其代ふあるーしこ[illegible]
乃こ[illegible]ふ[illegible]侍と[illegible]
[illegible]津岩系の記ハ治の体葛[illegible]の撰[illegible]
あるこーしこは[illegible]田氏の[illegible]
ぬし形山系[illegible]
[illegible]
應神天皇陵[illegible]田系卯月八日も[illegible]神功皇后三韓退治
車樂の[illegible]の[illegible]
[illegible]
右[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

惠日寺 尾州海東郡江上庄ふあり真言宗
[illegible]風ふと[illegible]
本尊正觀音 長文六[illegible]の小仲 [illegible]州[illegible]浦[illegible]出現 二層塔 愛[illegible]安に 右之時[illegible]建立 [illegible]系付きりに

萱津里 [illegible]舍駅治の体旧記ふ[illegible]
東海の萱津の系北朝[illegible]

ふぢくさの
社の神ふ祭れ
萩の枝ふ初生の
瓜茄子こもりて献
ふ陸奥ー松田
の行事ふ古れ
調進に続云
ふれとなん萩の
中の香の色ゝ
ゝ

孟宗ハ
日本ふ名
あるそう
萩の中ふ
孝行の
物
春泉

光明記

萱津の東宿のまんとゝ[illegible]そこ[illegible]の人あ[illegible]まりてくらしも[illegible]

はうふのくまゝあつて今月八市は月ふあんあるくるとぞいふあ[illegible]

世間のあぐひをてふむかしかくぬ家はをもらの月くれみや

人ふかくこんとよるゝたの系こんこは[illegible]ゆうくれたるゆ

[illegible]

阿波の浦　萱津のなかうむうしハ海をと月くこう　古紀考

名ぶたるあそそれ浦の海士をたもみるあこうくあこしを　拾雅光

波古　波くる社のひるまくあるくふ海あるそその浦れ海士とこいくや　清津賢

新勅　つる恋ハあるそその浦れくれ世貝むかしくのこもぬる社ふ　後法皇の人歌大歌の人

続古　よくくのふくはるもくるくる名ゆそるあそその浦れあ母のりふ火　後白河院

新千　浦ゆあそその浦ふよるくあたつる月そ今ハあまれをそこ[illegible]祢　西行

新後拾遺　徒ふくてうふうりそふひきくるあそその浦れおはのなうう火　宗祇法師

阿波の杜　阿波の神祠の神新を

新千　うた後くくくく

廢予間壯母予世禮而不聽朝政及
世伐事夢年有年則攻依故朝己不吾年憂許修
禮版牘日必此無盛富長家俗之生洛足取異表入陋討不
臣鄙輪八奇不財車方遠予邦寸於古陽土既作聞懷小城
中臣徒
八中臣徒
八敵
日
日
日

国立公文書館
National Archives of Japan